



日本財団

平成 23 年 (2011) 3 月 11 日、マグニチュード 9.0 の
巨大地震が東北地方太平洋沖で発生し、
直後の津波とあいまって、太平洋沿岸部に壊滅的な被害をもたらした。
各地の祭りや伝統芸能にかかある被害も甚大だった。

ぼろぼろになった獅子頭を前にして、
城内大神楽はもう20年も30年も
復活できないのではないかと
途方に暮れた

(小林一成城内大神楽保存会会長)



女川潮騒太鼓轟会の太鼓は津波に襲われた女川町生涯教育センターから取り出された
(写真:女川潮騒太鼓轟会)



尾崎青友会の山車は新造されたばかりだったが、津波で壊れて使えなくなった



川口神社の中神輿は神社から約200メートル離れた畑で見つかった

刊行のことば

東日本大震災では多くの貴い命が奪われ、家や職場を失って故郷に戻れなくなった方も数限りなくいらっしゃいます。さらに、東北地方は伝統芸能の宝庫と言われますが、震災により、芸能や祭りを行うのに必要な神輿、山車、獅子頭、楽器、衣装などが壊れたり流出したりして、多くの伝統芸能の存続が危ぶまれる状態になりました。伝統芸能は長い年月をかけて地域の暮らしの中で人々が磨き受け継いできた大切な宝です。芸能や祭りをとおして、人々は心を育み、郷土への誇りを高め、地域の絆を強めてきました。

日本財団では、そのような伝統芸能を復興することは芸能の保存・継承だけでなく、人々が希望を持って明日を生きるため、そして地域が再び力強く立ち上がるために必須のものと考え、「地域伝統芸能復興基金」（まつり応援基金）を設け、一連の支援活動を行ってきました。この取り組みについて関係者の方々にご報告するとともに、とくに岩手・宮城・福島3県在住の皆様へ、東北地方における芸能や祭りの素晴らしさを再認識し、震災からの復興に対し芸能や祭りが果たした役割を知る機会をご提供することで、より多くの方々にこれまで以上に伝統芸能に興味を持っていただき、県民全体でこれらを支える環境づくりがなされることを願って、この中間報告書を刊行いたします。

まつり応援基金では、これまでに150近くの芸能保存会や神社などに対し各種の支援をしてきました。そのすべてをこの報告書でご紹介することは叶いませんので、ここでは、主に地域や芸能の種類などを考慮して10団体を取り上げました。

この報告書の刊行に際しまして、取材にご協力いただいた各団体はじめ関連団体、個人の方々、寄稿していただいた皆様に心より感謝申し上げます。

この報告書が、被災された芸能保存会や神社の皆様が艱難を乗り越え、芸能を復活されるのに少しでもお役にたてればこれ以上の喜びはありません。

平成25年3月

日本財団

目次

| | | |
|--|------------|----|
| 刊行のこどば | 4 | |
| ■それぞれの軌跡 | | |
| 城内大神楽保存会 <small>じょうないだいかくらはほんかい</small> | 岩手県上閉伊郡大槌町 | 8 |
| 尾崎青友会 <small>おきせいゆうかい</small> | 岩手県釜石市 | 14 |
| 西館七福神保存会 <small>にしだてしちふくじんほんかい</small> | 岩手県大船渡市 | 20 |
| 仰山流笹崎鹿踊保存会 <small>ぎょうざんりゅうささざきしかおどりほんかい</small> | 岩手県大船渡市 | 26 |
| 磯草虎舞保存会 <small>いそくさこらまいほんかい</small> | 宮城県気仙沼市 | 32 |
| 雄勝胴ばやし獅子舞味噌作愛好連 <small>おがつどうしししまいみそきくあいこうれん</small> | 宮城県石巻市 | 38 |
| 女川潮騒太鼓轟会 <small>おながあらしおさいだいかどどろかい</small> | 宮城県牡鹿郡女川町 | 44 |
| 川口神社 <small>かわぐちじんじゅ</small> | 宮城県亘理郡亘理町 | 50 |
| 磯部敬神会 <small>いそべけいしんかい</small> | 福島県相馬市 | 56 |
| 安達太良太鼓保存会 <small>あだたらだいかどどろほんかい</small> | 福島県本宮市 | 62 |

コラム①シシ・トラ・シカの芸能 〈小岩秀太郎〉……………68

鎮守の森の復活——神社は心の拠り所

対談 ● 藤波祥子 八重垣神社宮司 × 尾形武寿 日本財団理事長……………69

八重垣神社植樹祭……………72

コラム②神楽——祈りの芸能 〈原 章〉……………77

大槌町の郷土芸能

● 碓川 豊 岩手県大槌町長……………78

鎮守の杜の復旧・復興を

● 小野目博昭 大崎八幡宮宮司……………80

民俗芸能ノチカラ

● 橋本裕之
追手門学院大学地域文化創造機構特別教授・岩手県文化財保護審議会委員……………82

復活した手踊り

● 紺野 薫 相馬市教育委員会生涯学習課主幹……………84

みこしがつなぐ被災地と住民

● 原口靖志 河北新報亙理支局記者……………86

コラム③東北の祭り・民俗芸能と太鼓 〈西角井正大〉……………88

戻ってきた結束力! ——祭りの求心力こそ接点

鼎談 ● 千葉秀司 葉山神社宮司 × 大和久男 名振新生会代表 ×

笹川陽平 日本財団会長 89

地域伝統芸能復興基金の成り立ち

● 塩見和子 日本音楽財団理事長 94

日本音楽財団／

ストラディヴァリウス1721年製ヴァイオリン「レディ・ブラント」 95

支援のコンセプト 96

コラム④神社参拝の豆知識 〈原 章〉 98

まつり応援基金支援実績一覧・収支報告 99

編集後記 104

*「それぞれの軌跡」は平成24年(2012)9月～11月に取材。役職や年齢などは取材時のものです。それ以外は平成25年(2013)時点のものです。

取材協力 赤阪友昭

須田郡司

原 章

イラスト 國本りか

デザイン 鷲草デザイン事務所

はやしデザイン事務所

編集協力 原 章(編集工房レイザン)



■それぞれの軌跡

城内大神楽保存会

岩手県上閉伊郡大槌町



◎町民こぞってお祭り好き

東日本大震災から1年半が過ぎた平成24年(2012)9月22日、岩手県上閉伊郡かみへい小槌町おおつちにある小槌神社こづちは、江戸時代から続く祭典の宵宮を迎えた。夕方になると境内は大神楽、鹿踊、虎舞の人たちや見物客で埋まり、祭りの熱気で沸き立っていた。

芸能の盛んな東北の中でも、とりわけ大槌町は町民こぞってお祭り好きで知られる。就職や学業でこの地を離れた人たちも、盆や正月には帰らなくても、お祭りになると何を置いても帰ってくるという。そして祭りのとき、蓄えてい



小槌神社秋の祭典の宵宮で奉納された城内大神楽

たすべてのエネルギーを出しつくす。だから、祭りが終わると虚脱状態になる。数日経って、また来年も祭りがあると思い直し、ようやく日常に戻っていく。

◎復興祈願と鎮魂のための祭典

三陸海岸のほぼ真ん中に位置する大槌町は、大槌湾に流れ込む大槌川と小槌川に挟まれた沿岸部が市街地の中心で、震災前は町民約1万5千人のうち4割くらいの人がこの地域に住んでいた。ところが大津波が大槌川、小槌川を遡り、この地域は壊滅的な被害を受けた。

小槌神社もその一角にあるが、山



秋の祭典が行われた小槌神社

すそにあったため津波の被害は免れた。また、地震のあとで山林火災が起こり、本殿のすぐ裏まで火の手が迫ったが、松橋知之宮司や氏子の人たちの懸命の消火活動で奇跡的に類焼を免れた。

それにしても、あまりにたくさんの命が失われ、家も流失して多くの町民が避難所暮らしを強いられた。東日本大震災が起きた年、秋の小槌神社の祭典は開催が危ぶまれたが、復興祈願、そして鎮魂のためにも祭りをやろうという声が強く、例年より規模を大幅に縮小して行われた。

◎10頭の獅子頭がそろい、山車も新調

この祭典になくはない郷土芸能の1つが大神楽で、城内大神楽はその代表格である。大槌町には、かつて大槌城という山城があっ



小林一成城内大神楽保存会会長

た。この城のお膝元が城内で、今は上町かみちょうと呼ばれる。江戸時代から、この地域の人たちが城内大神楽を伝えてきた。ふだんの稽古は、小鎚神社の駐車場の向かいにある上町ふれあいセンターで行われていたが、このセンターも3月11日の大津波で大人の背丈ほど浸水し、がれきが流れ込んだ。



宵宮の夜、いよいよ祭りが始まることを祝って

大神楽にとって獅子頭かづはご神体である。城内大神楽保存会は獅子頭を12頭もっていた。それらは小林一成しげ会長(72)宅の床の間に安置され、朝に夕にお祀りされていた。地震直後、小林会長は津波の襲来に備えて住民を避難させた。獅子頭を取りに行くところではなかった。あとで1頭だけ見つかったが、片耳が取れ、あちこちが傷んでいた。それでも、これを見本にして新しく9頭の獅子頭をつくることができた。他の道具は倉庫で保管していたが、すべて津波で流された。

「私も次女が行方不明になりました。人も家も獅子頭も失われ、城内大神楽はもう20年も30年も復活できないのではないかと思って途方に暮れていたんです。政府も県も期待できない。そこへ、救いの手を差し伸べてくれたのが日本財団さんでした。だから、日本財団さんには感謝の気持ちでいっぱいです」

日本財団のまつり応援基金のおかげで城内大神楽では10頭の獅子頭が揃い、祭りに欠かせない山車だしも新しくつくることができた。水に浸かった大太鼓3個と小太鼓3個は、胴を塗り直し、皮を張り替えた。

これまで使っていた山車は18年ほど前につくられたものだったが、今度の津波で壊れてしまった。そこで地元の大工の棟梁、小石幸悦さん(65)が新しく制作することになった。今年2月から息子さんと2人で作り始め、中須賀大神楽のものと城内大神楽のものと2基完成させた。中須賀大神楽の山車もまつり応援基金でつくられた。城内大神楽の山車は宵宮の前日に魂入れの儀式をした



城内大神楽の獅子頭。個人の2頭を含め12頭そろった

ところだった。それだけに、城内大神楽の一員として太鼓を叩く小石さんは澁刺としていた。



城内大神楽の明日を担う子どもたち



最初のお旅所で城内大神楽が奉納される。ささらに獅子をあやす子どもたち

◎後継者養成のために

大槌町の大神楽の主な演目には「四方固め」^{しほう}「通り」「獅子矢車」などがある。「四方固め」は東西南北の四方を清め払う荒々しい舞いである。「通り」と「獅子矢車」は神輿渡御のときに舞われるもので、「獅子矢車」のほうが荒っぽく舞う。城内大神楽は長い伝統があるので独自の舞い方をする。お囃子の音もよそと微妙に違うという。

今年の祭典では17の団体が奉納を行った。宵宮の夜、城内大神楽も境内で奉納舞を行った。太鼓や笛、手平鉦^{てびらがね}の歯切れのいいリズムに合わせて、ささらに持った子どもたちが獅子をあやし、大人がダイナミックな獅子を演じる。何度も大きな拍手が起こった。

城内大神楽保存会の会員は子どもを含めて現在約50名だが、この伝統を絶やさないために後継者養成に余念がない。5、6年前から女子の参加も認めた。

「みんなお腹の中にいるときからこのお囃子を聞いているので、反応がいい。だから、幼い子どもには右だ左だとあまり注意しないで、物心ついてきたら敵

今年2月11日、震災後初めての「大槌町郷土芸能祭」が大槌町城山公園体育館で開催されました。大槌町郷土芸能保存団体連合会の設立20周年記念行事で、城内大神楽保存会も鎮魂と復興への願いを込めて舞台に立ちました。

しくする、そういうつもりでやっています」と小林会長は話す。

23日の本宮当日、小槌神社の神輿は白い官服を着た社人会の人々に担がれて7つのお旅所を渡御した。その中には町長はじめ約40人の職員の方が犠牲となった旧町役場前も含まれていた。小槌神社のすぐ横にある最初のお旅所では、神輿を安置して神事を行ったあと、城内大神楽が奉納された。小林会長夫人の和子さん(68)も、「去年は境内だけだったけど、今年は渡御も行われ、露店もすぐ近くに出て、小槌神社のお祭りらしい感じになってよかった」と喜んでいた。

来年から大槌町では土地のかさ上げ工事が始まる。震災前の区画を神輿が渡御するのは、今年が最後となる。

(原 章)



社人会の人たちに担がれて威勢よく練り歩く神輿



渡御行列がこの道を歩くのも今年が最後だ

■それぞれの軌跡

尾崎青友会

岩手県釜石市



◎祭りがなければ復興への意欲も湧かない

岩手県釜石市では、毎年10月第3週の週末に「釜石まつり」が開催される。海の神を祀る尾崎神社と新日鐵住金の守護神社である山神社さんじんじゅが合同で行う祭りで、このとき釜石が1年でもっとも活気づく。

豊かな漁場と日本の近代製鉄発祥の地として有名な釜石だが、近年は漁業の衰退、鉄鋼業の斜陽化などで人口も減少傾向にあった。そこに起こった東日本大震災の打撃ははかりしれない。しかし、そんなまちだからこそ、祭りにかける人々の思いはひとしおだ。

尾崎神社の佐々木裕基宮司(47)によると、東日本大震災が起きた平成23年(2011)は、関係者の間で釜石まつりはやめようという話が何度も出た。しかし、何とかやってほしい、祭りがなければ復興への意欲も湧かないという市民の声が強く、規模を縮小し、鎮魂と釜石復興の祈願として開催された。

◎虎舞は三陸沿岸部で盛んな伝統芸能



尾崎神社の里宮

そして震災から1年7カ月経った平成24年(2012)10月19日から21日にかけて、震災後2度目の釜石まつりが行われた。

19日は午後6時から、釜石港の北側、浜町はまちょうの高台にある尾崎神社で宵宮祭の神事が執り行われた。神事が終わって、近く

の尾崎公園に行く
と、街灯の下で十
数人の若者が虎舞
の稽古をしていた。
虎舞の団体、
尾崎青友会の中学
生、高校生で、指
導しているのは尾
崎青友会OBであ



尾崎公園で虎舞の稽古をする尾崎青友会の若者たち

り釜石虎舞保存連合会会長でもある岩間久一氏(56)だ。

虎舞は三陸沿岸部で盛んな伝統芸能で、釜石には14の団体があるという。簡単に言えば獅子舞の虎バージョンで、1頭に2人が入り、太鼓、横笛、手平鉦によるお囃子やかけ声に合わせて、飛んだり跳ねたりじゃれ合ったり、虎の動きを模しながら縦横無尽に踊り回る。釜石まつりのときは、全国各地から虎舞を見るために帰ってくる釜石出身者も多い。

岩間会長によると、尾崎青友会の会員は現在約50名だが、その人たちが住んでいた地域は東日本大震災の津波でほぼ潰滅した。「うちの会でも2人が亡くなっています。そいつらの分まで頑張らねば、と思ってやっています」

いまは仮設住宅に住んでいる会員も多い。だから稽古に集まるのも大変で、祭りの前の半月間、毎日放課後集中的にやっているという。



岩間久一釜石虎舞保存連合会会長

◎釜石まつりのハイライト「曳き船まつり」

20日は釜石まつりのハイライト、尾崎神社神輿海上渡御が行われた。一般には「曳き船まつり」として親しまれている。尾崎神社は日本武尊、綿津見神、閉伊三郎源頼基公がご祭神で、昔から漁民の信仰が厚い神社だ。浜町にあるのは里宮で、奥の院と奥宮、本宮は釜石市の南側から太平洋に突き出た尾崎半島にある。ご神体は奥宮に祀られ



神輿の乗ったお召し船(中央)に向けて虎舞を舞う

ているため、年に1度、お召し船に神輿を乗せて御霊みたまをお迎えに行く。そのとき、神楽船や虎舞の各団体などが乗るお迎え船が何隻も出て海上がにぎわう。もっとも、震災の起きた平成23年は神楽船とお召し船の2隻だけだった。

20日朝10時、13隻の船が釜石港の新浜町埋立地岸壁を出港、快晴の空のもと大漁旗をはためかせ、奥宮のある尾崎半島あおだしまの青出浜に向かった。御霊が移され、鈴なりの人が待ち構える岸壁に戻ると、船団のパレードが始まる。お召し船が近づくと人々は手を合わせる。神楽や虎舞が船の上で勇壮に舞い踊ると、観客は歓声をあげ、拍手をし、手を振り、写真を撮る。みんなうれしそうだ。午後1時ごろ神輿は陸に上げられ、そのまま里宮に向かった。



◎釜石虎舞フェスティバル

20日はさらに釜石虎舞フェスティバル 只越虎舞の船中で子どもが上手に太鼓を叩いていた



虎舞フェスティバルで披露される尾崎青友会の虎舞

バルがあった。尾崎青友会、箱崎虎舞保存会、只越^{ただこえ}虎舞など地元の団体のほか、八戸や遠野の団体も参加した。「浜は大漁 陸は万作 商い繁盛で ほっほっほっほっ よいやさー」。歯切れのいいお囃子、威勢のいい掛け声に乗せて、「遊び虎(矢車)」、「跳ね虎(速虎)」、「笹喰み」などの演目が次々と披露される。

虎舞フェスティバルが終わると、地元の団体はそれぞれの拠点に戻った。これから夜まで1軒1軒虎舞をしまわるといふ。「門打ちと言ふんです。そうやってお花(ご祝儀)をいただき、それが活動費になります。でも、さすがに去年はどの団体も、被災していない地域にもまわりませんでした」と釜石虎舞保存連合会事務局の菅田靖典さん(55)。

震災では山車^{だし}や太鼓^{とらがしら}、虎頭が壊れたり流失した団体も多い。

「虎頭は自分たちで木枠に紙を貼って造りますが、山車や太鼓などは自力で何とかするのはとても無理でした。ですから、日本財団さんには本当に感謝しています」と菅田さん。

岩間会長も、「尾崎青友会の山車は新しく造ったところだったんです。それが、半



釜石駅前の「シープラザ遊」で尾崎神社と山神社の神輿が合流し合同祭を行う

年後に津波でだめになりました。まつり応援基金のおかげで連合会の各団体の山車や宮太鼓・附太鼓を造ることになり、ありがたいと思っています」。

◎伝統芸能を受け継ぐ子どもたち

21日は1日中強風が吹き荒れた。朝、尾崎神社、山神社両社から神輿が出発、神楽や虎舞、ししおどり鹿踊、七福神などさまざまな団体が加わり、行列して釜石駅前の「シープラザ遊」を目指す。ここで両社の神輿が合流し合同祭が行われたあと、釜石港に向かって約2キロの陸渡御が始まる。途中、要所所で神輿を留めて神事を行い、その横で虎舞などが奉納される。虎舞フェスティバルが開かれた会場で最後の神事と奉納が行われたあと、御霊を乗せた神輿は再び船に乗せられ、岸壁から東前太



山車が未完成なのでリヤカーに太鼓を積んで門打ちにまわる尾崎青友会のメンバー

NHKテレビ「嵐の明日に架ける旅～希望の種を探しに行こう～」で嵐の二宮和也くんが釜石に来て虎舞に挑戦、ずっと腰を落とした姿勢に「きつい!」 岩間会長の虎舞も披露され、視聴した多くの人が感動していました。



本宮の朝、市内巡行をする尾崎青友会

神楽や錦町虎舞の人たちに見送られながらひっそりと奥宮に還っていった。

釜石でよく目にしたのは、3、4歳の子どもが熱心に虎舞を見ていたり、楽しそうに太鼓を叩いている姿だ。只越虎舞の佐々木毅さん(57)によると、幼いころから虎舞に憧れ、あんなふうに踊ってみたい、太鼓を叩いてみたいと思って虎舞の団体に入ってくる子どもは少なくないという。そうやって伝統芸能が次の世代に受け継がれていくばかりでなく、震災の経験などもいっしょに語り伝えられていくことだろう。それが伝統芸能に厚みを与え、その伝統芸能が地域の絆を強める上でいっそう大きな役割を果たしていくにちがいない。

(原 章)



奥宮に還る神輿船を見送る人々



■それぞれの軌跡

にしだてしちふくじんほぞんかい 西館七福神保存会

岩手県大船渡市



◎大船渡市郷土芸能まつり

平成24年(2012)11月3日、快晴、岩手県大船渡市民文化会館リラスホールで午前11時から第42回大船渡市郷土芸能まつりが開催された。昨年は東日本大震災が発生し大船渡市も甚大な被害を受けた。パンフレットを見ると、「皆さまに支えられ大震災から、不死鳥のごとく復活 郷土芸能感謝の舞」と書かれていた。今年の郷土芸能まつりは11団体が参加、最初に東日本大震災で亡くなった多くの犠牲者に黙禱を捧げ、大船渡市郷土芸能協会会長の平山徹さんのあいさつで始まった。

各団体の持ち時間は約20分、次から次へと郷土芸能が披露される。末崎町の西館七福神は昔から子どもたちが演じるもので、5番目に登場。笛と太鼓のお囃子に合わせて小学生から中学生までの子ども七福神たちが、新調された立派な衣



公演前で緊張している西館七福神保存会の子どもたち

装を着て踊る姿は、あどけない。約700人の観客の前で、子ども七福神たちは堂々と舞っている。やがて、七福神1人1人の舞いが始まり、会場には笑い声が広がった。

◎笑ってもらうのがいちばんうれしい

七福神の順番は、大黒天、恵比寿、福祿寿、毘沙門天、寿老人、弁財天、布袋和尚で、弁財天を演じているのは紅一点の小学校5年生の女の子。七福神の中で大きな見せ所は恵比寿が釣り竿を持って魚を釣りあげる演技。魚もかなりリアルに作られていた。幼い福祿寿舞の仕草では会場に笑いの渦が起こった。

「七福神の舞いは、みなさんに笑ってもらうのがいちばんうれしいことなんです」と西館七福神保存会会長の武田隆さん(64)は言った。

西館七福神の歴史は古く、末崎町の伝説によると、鎌倉時代の北条時頼のときにご神体、みこし、楽器を乗せた船が音楽を奏でながら泊里浜とまりに漂着した。



武田隆西館七福神保存会会長



式年祭のときに西館七福神が奉納される熊野神社(写真：大船渡市商業観光課)



上左から右へ、大黒天、恵比寿、福祿寿、毘沙門天



左から右、下へ、
寿老人、弁財天、
布袋和尚



そのときご神体をお祀りしたのが熊野神社(大船渡市末崎町字中森)だった。それ以降600年以上の長きにわたり、熊野神社の祭りでは子どもたちがこの舞いを奉納してきた。日常生活を営むうえで、五穀豊穡、大漁萬作、商売繁盛、無病息災を願わない人はいない。七福神の舞いはその守り神として滑稽味をもった身振りよろしく踊られるという。



大船渡市郷土芸能まつりの舞台上で舞う子どもたち

◎イベントの1カ月前から踊りを練習

郷土芸能まつりの前日、末崎の仮設住宅で暮らす武田会長を訪ね、仮設住宅の談話室でお話をうかがった。末崎町はリアス式海岸でできた風光明媚な景観を持つ碁石海岸の近くにあった。

「末崎町の西館地区で踊られているものが西館七福神です。西館七福神保存会のメンバーはいま20名いますが、そのうち子どもが10名で女性が3名です。七福神舞いは、4年に1度、旧暦9月14日の熊野神社式年祭のときに奉納されます。それ以外では毎年行われる碁石観光祭、大船渡市郷土芸能まつり（不定期）などです。

踊りの練習は、イベントがある1カ月ほど前から始まります。震災後、一時避難所になっていた碁石コミュニティーセンターを借りて金曜日以外の連夜、19時から21時まで行っています。七福神の踊りは道化の動作がむずかしく、子どもたちですから、集中できるのは1時間くらいですね。

西館七福神は、もともと熊野神社を中心とした地域で踊られていました。その一部の地域が津波に襲われ、装束、笛、太鼓を保管していた建物も流されてしまいました。メンバーの1人が津波の犠牲になりました」

被災直後、武田会長はこの伝統芸能をどうやって継承していったらいいかわからなかった。そんなとき、まつり応援基金の話を聞いて申請をさせてもらい、

今年の1月20日から3月24日まで第16回つばきまつりが大船渡市で行われ、初日に西館七福神保存会の子どもたちが出演しました。ちなみに、七福神の多くはインドや中国から来た神様で、恵比寿だけが日本の神様です。

日本財団から装束、
笛、太鼓の支援をいた
だいたという。

太鼓は、大船渡市に
ある新川靴・太鼓店の
新川徳男さん(74)に注
文した。新川さんを訪
ねてお話をうかがう。

「私は太鼓職人の3
代目で、初代から百年
ほど続いています。今
回、多くの太鼓が津波
で流されてしまいましたが、注文をいただいたとき、
いいものを作って喜んで使ってもらえる太鼓を納めた
いと思いました」

武田会長は「注文して太鼓ができるまで約半年かか
りました。太鼓の音は、以前と比べるとやや低いので
すが、なかなか立派なものです」という。

◎子どもたちの育成のためにも

今後の活動をお聞きすると、「日本財団のおかげで、
装束や笛、太鼓がそろったので、もっと積極的にいろ
いろな場所で公演活動をしてゆきます。この歴史ある
伝統文化を絶やさないで代々伝えて、みなさんの思いをつなぎます。応援して
いただいた方々、地元の方々に見ていただき喜んでもらいたい。子どもたちの
育成のためにも続けてゆきたいですね」。

公演が終わって楽屋に行くと、子どもたちのまわりに親御さんが集まってい
た。大きな仕事を終えて、みんなほっとした表情だった。子どもたちに公演の
感想を聞くと、「大勢の前で踊るのはとても緊張しました。踊りは難しいけど、
また踊りたいです」と元気な笑顔で答えてくれた。



まつり応援基金の支援で購入された太鼓



新川徳男さん

■それぞれの軌跡

ぎょうざんりゅうきさきざきししおどりほぞんかい 仰山流笹崎鹿踊保存会

岩手県大船渡市



◎『もののけ姫』のシシ神を彷彿

平成24年(2012)11月3日、大船渡市民文化会館リアスホールで行われた第42回大船渡市郷土芸能まつりで、仰山流笹崎鹿踊は10番目に披露された。8人の男性が鹿頭を頭に戴き、腰につけた太鼓を叩きながら勢よく踊る姿は、約700人の観客の目を釘付けにした。鹿踊は、どこか宮崎駿の映画『もののけ姫』に出てくるシシ神を彷彿させるものがあった。

祭りの前日、仰山流笹崎鹿踊保存会会長の佐藤正志さん(74)から、大船渡小学校の体育館で鹿踊の練習をするとお聞きし、練習風景を見たいと思い、夜7時過ぎに大船渡小学校体育館にうかがった。そこには十数名の青年が集まって踊りの前の準備運動をしていた。やがて、太鼓を腰に着け、打ち鳴らしながらの激しい稽古が始まった。体育館の中に太鼓を打ち鳴らす音が響き渡った。

◎やさしさを象徴する鹿頭



佐藤正志 仰山流笹崎鹿踊保存会会長

鹿踊とは、鹿の頭部を模した鹿頭とそれから垂らした藍染めの麻布で上半身を隠し、竹(ささら)を背負った踊り手が、鹿の動きを表現するように上体を大きく前後に揺らし、激しく跳びはねて踊るものだ。

鹿踊の歴史や由来にはいろいろな説がある。会長によると、鹿踊はわが国の仏教の伝来にさかのぼり、インド方面から伝わったものと言われる。太古素朴の時代、山野に群生する鹿の世界を神秘的なものとして神聖視した動物崇拜の観念と相まって、人間が鹿をよそおって舞踏す



第42回大船渡市郷土芸能まつりで披露された仰山流笹崎鹿踊

るところに超自然的な力が現出するという原始信仰の面影を見ることができる。特に牡鹿は美麗なる鹿角を配した異形の鹿頭を頭に載き、腰に9尺3寸の竹(ささら)を付け、直径1尺3寸の太鼓を腰につけて牡鹿8名、牝鹿1名の9名で太鼓を打ち唄を唄い、一糸乱れずリズムにのって舞踏する。一般的に鹿踊の頭は獅子に似た厳めしさを持っているが、仰山流笹崎鹿踊の頭はやさしさを象徴していて、頭は少し小さめにできているのが特徴だという。

仰山流笹崎鹿踊の歴史は、今から244年前の明和5年(1768)にさかのぼる。陸前国本吉郡清水川村より7代の相伝を経て伝えられた鹿舞を、日頃市村坂本沢屋敷の理惣太が伝授され、相伝状とともに伊達家赤九曜紋、仰山の文字、鶏毛の前垂れを携えて大船渡村字笹崎大草嶺家の養子となり、笹崎鹿踊の基を開いたという。以来、南・北笹崎、浜町より選出された役員と師匠、踊り子で構成される保存会を中心に、神社の祭りや地元の文化祭などに参加している。



(上) 大船渡市郷土芸能まつりの前日、大船渡小学校体育館で練習する仰山流笹崎鹿踊保存会のメンバー
 (左) 中学3年生の佐藤天地君は若手のホープだ



◎中学1年生で初めて踊る

体育館での鹿踊の練習を見ていると、青年に混じって1人の男子中学生がいた。佐藤会長に尋ねると、お孫さんの佐藤天地君(15)だった。鹿踊は男性8人で踊るため、人数が集まらないときのピンチヒッターだという。佐藤君は中学3年生とはいえ身長もあり堂々としていた。彼にどうして鹿踊をするようになったのかを尋ねてみた。

「お父さんやおじいさんが鹿踊をしていたのを小さいころからずっと見ていました。初めて踊ったのは中学1年生のときです。鹿踊は迫力があり、とてもかっこいいと思いました。中学生にも人気があり、鹿踊を踊るためのオーディションがあって、それに通ったときはうれしかったです。今後いろいろなところで踊りたいです」と語った。

◎国立民族学博物館でも公演

佐藤会長に、これまでの活動、東日本大震災当時のことなどをお聞きする。

「東日本大震災では、幸いにも人命に関わる被害はありませんでした。ただ、鹿踊の装束、鹿頭、太鼓を保管していた



鹿踊が奉納される大船渡町の賀茂神社

建物が津波で流されてしまい、道具一式がなくなってしまいました。日本財団には、装束や鹿頭、太鼓を寄付していただき本当にありがたいことです。また、鹿角は、愛deerプロジェクトという、東日本大震災被災地で犠牲になった鹿踊用の鹿角を支援するボランティア団体の方に送っていただきました。たくさんの方々を支えられて鹿踊を復活できたことに感謝しています。

道具がそろってから、縁あって今年6月には大阪の国立民族学博物館、神戸市長田区の若松公園で鹿踊の公演をさせていただきました。そして、7月8日にここ大船渡小学校体育館で地元の方々にお披露目をさせてもらったのです」

◎大船渡の復興につなげたい

佐藤会長によれば、保存会の会員は現在20名いて踊り手は10名いるという。地元の賀茂神社の式年祭で5年に1度奉納してきた。その他、毎年、大船渡中学校文化祭で披露したり、大船渡市郷土芸能まつりなどでも不定期ではあるが披露しているという。これまで、中学生に23年間指導を続けていて、その中から鹿踊の担い手が生まれている。

この郷土芸能をこれまでやってきてもっともうれしいことは何かと尋ねると、佐藤会長は「中学校文化祭で披露したとき、子どもたちに『やっぱり鹿踊がいちゃんだなあ』と言われたときですかね。子どもたちにそう言われるとうれしいですね」。



仰山流笹崎鹿踊「二人狂い」

今後のことをお聞きすると、「特に新しいことをやりたいという気持ちはありません。この踊りをつづけてゆくことだけです。やりつづけていけば、少しでも大船渡の復興につながるのではないかと思います。外から招待されるのはありがたいですが、メンバーはそれぞれの仕事を持って鹿踊をしているので、無理のない範囲で続けてゆきたいと思っています」。

昨年7月に大阪の国立民族学博物館と神戸の若松公園で行った仰山流笹崎鹿踊保存会の公演は大きな反響がありました。今は夏まつりに向けて充電中。高校生になった佐藤天地君は野球部に入り、練習の毎日です。



仰山流笹崎鹿踊「三人狂い」

◎夢は伝承館の設立

祭り当日の朝、佐藤会長の案内で、太鼓を作った新川靴・太鼓店の店主新川徳男さん(74)を訪ねる。お店の中には、靴といっしょに大小の太鼓が並んでいた。新川さんに太鼓作りの苦労話を聞いた。

「今回、ほとんどが津波で流されたのですが、1つだけ古い太鼓が残りました。その太鼓を見ながら、忠実に同じ太鼓を作るように心がけました。鹿踊のみなさんに喜んでいただければ何よりです」

最後に佐藤会長は、「将来的には鹿踊の道具一式を保存できる伝承館のようなものを作るのが夢です」と笑顔で語った。
(須田郡司)



新川さんに太鼓を見てもらう佐藤会長

■それぞれの軌跡

磯草虎舞保存会

宮城県気仙沼市



◎他地区の子どもたちにも参加呼びかけ

残暑の厳しい日が続く中、江戸時代から伝わるという伝統芸能「磯草虎舞」が平成24年(2012)9月15日に宮城県の気仙沼大島で行われた。毎年大島神社の秋季例大祭にはお神輿の渡御みこしに合わせて、磯草地区の虎舞が島内の各地区を巡回し伝統芸能を奉納してきた。悪魔払いや良い縁起を願って舞う虎舞は、この日、仮設住宅がある休暇村を含めて島内の11カ所を巡回した。



虎舞の太鼓を一生懸命に叩く子どもたち



仮設住宅でとこ狭しと二頭の虎が舞う

磯草虎舞保存会は今年の例大祭でひとつの試みを行った。震災後、島の人口が減り磯草地区の子どもは一時、数人になってしまった。もともと虎舞は磯草地区の住民だけで行ってきたが、今年に入ってから一般に公募をして他の地区の子どもたちにも参加を呼びかけることにしたのだ。その結果、大島のさまざまな地区からおよそ20名の子どもたちが虎舞に参加することになった。現在、大島の小学生が約60人、中学生が約80人であることを考えれば決して少ない数ではない。

◎嬉々として練習する子どもたち

全員がそろったのは今年の春だが、子どもたちの力はすごい。春から練習を始めて9月のこの日までまだ半年しか経っていないにもかかわらず、もう何年も太鼓を叩いているようなリズムを生み出している。保存会としては昨年からのいろいろなイベントや催しに参加してきたこともあって、正月休み以外はほとん



無病息災を願うお年寄りや子どもの頭を虎が噛む

ど週に1度という具合に練習を重ねてきているが、太鼓を叩く子どもたちを見ていると嬉々として練習に励んでいる様子うかがえる。

巡回する地区ごとに子どもたちが紹介され、応援にかけつけた家族が手を振っている。磯草虎舞が大島全体から子どもたちを募ったことは、結果として大島の

各地区の人々をつなぎ、後継者を育てることへとつながっている。しかし、子どもたちは高校生になると島外へと出てしまう。これからの課題はどうやって後継者を確保し、育成していくかである。

「いつか帰って太鼓を叩きたい、そう思って大島に戻ってきてくれる人が増えるといいですね」というのは虎舞の中堅を務める管原康浩さん(43)である。磯草に生まれ育った彼にとって小学校に上がれば虎舞に入るのは「当たり前」だった。子どもが生まれれば小太鼓を買うのも習わしのようなものだった。その当たり前の日常が震災を境に変わってしまった。だから、「昨年のはじめて祭りができた日は本当にうれしくて涙が出た」という。流失した太鼓は長年かけて少しずつ買い揃えたものだけにそれぞれに思い入れがあった。「今の新しい太鼓とは、先達がそうしてきたように活動を重ねていくことでじっくりと関係を作り上げることになる」という。

◎梯子の上で舞う虎舞の復活が願い

先達からの継承という意味で、磯草虎舞保存会会長の小野寺清次さん(69)にはまだ果たせていないことがある。梯子はしごの虎舞である。35尺(約10メー



小野寺清次磯草虎舞保存会会長



(上) 津波の被害が大きかった長崎地区の浜の前で
(下) 敬老会に集まった300人を超える島民に披露

トル)もある梯子をトラックの荷台に固定し傾ける。舞い手は命綱をつけることもなく駆け上がり、梯子の上で舞う。虎舞のもっとも勇壮な演目である。この梯子が流されてしまった。



最後に虎舞が訪れたのは仮設住宅だった

「磯草の特徴は梯子でした。それができないことには虎舞が完全に復活したとはいえない」

島の復興への願いを込めて、かつての勇壮な虎舞を取り戻す。それが自分の役目だと考えているという。

「昨年は虎舞をやるべきかどうか本当に迷ったが、やってよかった。バラバラになりそうだった人々の心をつなぎとめることができたと思う。あらためて虎舞の伝統の力を考えさせられました」。そう語るのは虎舞指導者の小野寺恵一さん(45)である。今後の虎舞についての思いを尋ねてみた。



津波で流された家の基礎に座って虎舞を見る人々

「日本財団から虎舞にとって欠かすことのできない太鼓を支援していただいたことは、すごく大きな力になりました。しかし、今回のことで実感したのは、確かに物はそろそろけれども物に託されていた思いを再び取り戻すのはそう簡単なことではない、ということです。伝統芸能は、

今年3月9日、キズナ強化プロジェクトで気仙沼大島を訪問しているアメリカの学生たちと島民が交流、磯草虎舞保存会の披露のあと、学生たちも太鼓を体験しました。

まず先達の仕業があって、それを次の者たちが受け継いでゆくという行為を続けてきたことによって現在の私たちに伝えられています。今、私たちは新しい道具を手に入れましたが、先達に習って次の担い手たちにこれらを受け継がせてゆかなければならないと思うのです」



若い担い手のひとり小松文弥さん

◎大島全体の伝統芸能へ

そんな次世代の担い手のひとりに小松文弥さん(17)がいる。現在、気仙沼の高校に通う彼は小学生のころから磯草虎舞に参加し、毎年夏休みに入ると虎舞の練習が日課となるような毎日を送っていた。レパートリーは20～30曲あり、ほとんどすべての虎舞の演目を演じることができるという。震災後は、道具は失われ、大島から人がいなくなり、練習時間や場所の確保も難しくなるなど虎舞を諦めかけていた。それがさまざまな支援によって祭りができるときは本当にうれしかったという。彼の夢を聞いてみた。

「百年以上続いている素晴らしい伝統を後輩たちに伝えていきたい。これまでの磯草という枠を越えて大島の他の地区の人たちとのつながりを大切にし、もっと大勢で虎舞を演奏できるようにしたいですね」

「伝統」と呼ばれるものは、時代や環境に応じてしたたかに変化することで生き残ってきたものたちである。磯草の虎舞は、この震災によって大島全体の伝統芸能へと大きく変わる転換期にある。

(赤坂友昭)



お疲れさまでした。最後の集合写真

■それぞれの軌跡

雄勝^{おがつどう} ばやし^し獅子舞^{しまい} 味噌^み作^そ愛^さ好^く連^{あいごうれん}

宮城県石巻市



◎新山神社の秋の祭典

平成24年(2012)11月4日朝、快晴のもと、宮城県石巻市雄勝町上雄勝にある新山神社の下に数軒の出店が並び、200人近い人々が集まっていた。新築された新山神社の本殿には小田道雄宮司と氏子総代の方が座り、太鼓の音とともに秋の祭典が始まろうとしていた。

東日本大震災の津波は、雄勝町に壊滅的な被害を与えた。高さ十数メートルもの大津波は、大型バスを3階建ての建物の上に押し上げ、小学校の屋上に民家を持ち上げた。あれから1年8カ月近く経って新山神社は小高い丘の上に再建された。



復興再建された新山神社社殿

お供え物が奉納され、祭典は始まった。その光景は雄勝の復興の第一歩を象徴しているように見える。

新山神社は、東日本大震災の津波で社殿はすべて流された。わずかに狛犬が残るのみ。奥社があった場所に行くと、崖上のフェンスは津波の力で曲げられ、その破壊力を物



雄勝胴ばやし獅子舞味噌愛好連の2体の獅子舞

語っていた。新山神社は、神社本庁、宮城県神社庁、伊勢神宮、鹿島建設の支援を受け、被災神社の復興として宮城県で最初に再建された。とはいえ、社殿は以前あったものと比べるとかなり小さな建物である。



獅子舞の奉納の前に新山神社を参拝する





新山神社の奥社跡から氏子地区を眺める

◎お祓いとして踊られた獅子舞

新山神社の祭典は滞りなく終了し、氏子総代の遠藤卯之助さん(86)が、「みなさん、どうか雄勝に帰ってきてください。人が帰ってきてこの町が再生するのです」と切実な思いを語った。つづいて雄勝胴ばやし獅子舞味噌作愛好連会長の川田徳雄さん(74)のあいさつで獅子舞が始まった。

祭り囃子の笛と太鼓の音に合わせて、大獅子と小獅子が踊る。太鼓の下には、「復興祈願」の文字が書かれていた。やがて、2体の獅子が神社まで駆け上がり、獅子頭をとって新山神社を参拝した。それから、獅子は石段を下って観客の頭を嚙んでゆく。時折、おひねりが獅子に渡される。

「獅子舞は、もともとお祓いとして踊られたものです。この胴ばやし獅子舞は室町時代からつづくもので約600年の伝統があります。私は仕事で大阪に20年ほど住んでいましたが、親に戻るようと言われて雄勝町に戻ってから、この地域の胴ばやし獅子舞と出会いました。そして、この伝統芸能が絶えようとし



まつり応援基金で新調された太鼓を力を入れて叩くメンバー

ている状況を見て、これを残そうと昭和38年(1963)に胴ばやし獅子舞味噌作愛好連を立ち上げたのです」

会長の川田さんはつづけて「この胴ばやし獅子舞は、もともとは雄勝法印神楽の三十三番の中の1つの演目で、旧暦10月19日に新山神社で奉納するものでした。最大の役目は正月3日に行われた春祈禱です。雄勝町全域の各地区の家々を回って悪魔払い、家内安全を祈禱していました。東日本大震災では、装束や笛、太鼓が流されてしまいま



あいさつをする新山神社氏子総代の遠藤卯之助さん。
左は川田徳雄雄勝胴ばやし獅子舞味噌作愛好連会長



獅子に頭を噛んでもらう

した。残ったのは法被が1着だけでした」。

◎解散を食い止めたまつり応援基金

そんな状況の中、川田会長は、胴ばやし獅子舞味噌作愛好連をやむなく解散しようと思ったという。そのとき、まつり応援基金の復興支援の話聞いて申請をした。

「日本財団には、装束、笛、太鼓、獅子頭などの支援をいただくことができました。去年の12月までに笛や太鼓がそろい、最近獅子頭（大獅子、小獅子）がようやく完成しました。ありがたいことです」

胴ばやし獅子舞味噌作愛好連の会員は25名で、そのうち子どもは8名、女性は5名。残念ながら1人の方は津波の犠牲になったという。もともとこの獅子舞は新山神社の例大祭、正月の春祈禱が主で、たまに結婚式や成人式などでも披露されていた。震災後は、老人ホームや仮設住宅などで公演をして被災者を元気づけている。稽古は、石巻市から森林公園のバンガローの1棟を借りうけて毎週日曜日の夜にやっているとのこと。そこは衣装、笛、太鼓、獅子頭などの保管場所にもなっていた。

獅子舞が終わったあと、雄勝法印神楽が奉納された。暖かい日差しのもと、観客は午後3時ごろまで演目を楽しんでいた。

◎まず地元の役に立ちたい

川田会長は、今後の雄勝町のことを思うと気持ちは複雑だという。「震災後、胴ばやし獅子舞愛好連が長山の敬老会で披露したとき、120人の方々が喜んでくれました。お年寄りには腰を曲げながらいっしょに踊ってくれ、感動しました。私たちは、地域の方々に慕われるのがいちばんうれしいことなんです。ただ、雄勝町をどのように再生するか、それは見えていません。その第一歩として祭典をしているのに、行政の人がほとんど来ていないことは残念です」

今年1月3日、石巻市の仮設住宅すべてをまわり春祈禱を行いました。1月6日には「おがつ店こ屋街(たなこやがい)」で舞いました。「店こ屋街」はプレハブ2棟11店舗で構成された、雄勝地区唯一の復興商店街です。



多くの参拝者に見守られながら奉納される獅子舞

最後に「今後は、子どもたちに教えながら後継者をつないでゆきたいと思っています。本当にこの胴ばやし獅子舞をやりたい人を探して、子どもたちをスカウトしてゆきたいです。今後の夢として、来年1月3日の春祈禱をぜひ行いたいと思っています。残っている19世帯だけでなく、多くの方々は家が流され仮設住宅で暮らしているので、その仮設住宅すべてを回りたい。まず何か地元の役に立ちたいのです。それが、この胴ばやし獅子舞の役割だと思うのです。そこから雄勝の再生を祈念したいのです」と会長は熱く語った。

祭典終了後、新山神社の小田宮司は言った。

「この地域は、ほとんど家が流され、仮設住宅での生活が続いています。石巻市も今後の町づくりをどのようにするか、不透明な状態が続いています。これからどうなっていくのか心配ですが、今日の祭典は、復興の新しい道しるべになりました」

(須田郡司)

■それぞれの軌跡

おながあしおきいだいこどろきかい

女川潮騒太鼓轟会

宮城県牡鹿郡女川町



◎「太鼓」なんて口にできなかった

女川潮騒太鼓轟会は平成5年(1993)に誕生した。もともと宮城県牡鹿郡女川町の公民館事業の1つとして太鼓講座が開かれ、その受講生が中心になってつくられた。女川町の秋刀魚収穫祭、水産祭り、成人式といったイベントや結婚式などで演奏するほか、平成7年(1995)からは小中学校の総合学習で太鼓を教えてきた。

東日本大震災前、女川町は人口約1万人の町だったが、震災で800人以上の



平成24年10月28日に開催された宮城県こども太鼓フェスティバルでの轟会の演奏

方が亡くなり、約7割の家屋が失われた。轟会は震災前には30名ほどメンバーがいたが、現在は約20名。初代会長も行方不明になった(平成24年9月にご遺体が確認された)。家が残ったのは3軒だけで、ほかの人たちは仮設住宅に住んでいる。女川を離れた人もいる。

震災前、練習は女川町生涯教育センターの2階大ホールで行われ、太鼓もそこに置かれていた。津波で同センターは4階まで浸水し、38台あった太鼓すべてが泥まみれになった。

轟会の代表齋藤成子^{さいとうしげこ}さん(48)の自宅は2階の床下1センチまで津波に浸かったが、2階はかろうじて住める状態だった。しかし齋藤さんは1カ月以上引きこもりになり、太鼓のことは考えられなかった。

「自分の家族が無事でも、親戚や友人の家族の中には亡くなったり行方不明になった人が何人もいます。うちの家はいちばん奥のほうなので、流れてきたご遺体も多い。『太鼓』なんて口にできる状況ではなかったのです」



女川潮騒太鼓轟会の齋藤成子代表

◎太鼓の音に向かって駆け出した

震災の年の5月6日、齋藤さんと事務局の鈴木真紀さん(36)がこれから轟会をどうするか話し合っていると、突然、ドーンという力強い太鼓の音が聞こえてきた。ふたりは驚き、その音に向かって駆け出した。女川町勤労青少年センターの避難所の前で、神戸の太鼓衆団「輪田鼓^{わだつみ}」の人たちが演奏していた。16年前に阪神淡路大震災に遭った輪田鼓は、少しでもそのときの恩返しがたくて東北を訪れ演奏していたのだ。齋藤さんと鈴木^{よしほろ}さんはその演奏を聴いて涙があふれた。すると、町の人たちが輪田鼓の代表田中嘉治さん(60)にこうお願いした。

「ふたりは女川で太鼓を叩いている人たちで太鼓が使えなくなったんです。この人たちの演奏も聴きたいので、太鼓を貸してあげてください」。田中さんたちは快くばちを渡した。

「齋藤さんも鈴木さんも最初はためらっていましたが、涙をこぼしながら演奏



練習場になっていた女川町生涯教育センターも4階まで津波に襲われた（以下、48ページ以上以外の写真：女川潮騒太鼓轟会）

を始めると、聴いている人たちも涙ながらに拍手喝采していました」と田中さん。

齋藤さんは、「このとき力をもらいました。みなさんがそれほどまで思ってくれているのがうれしかったし、自分たちがへこたれてはだめだと思いました」。鈴木さんも、「ばちを渡されたときは迷いましたが、自分たちの演奏で町



ボランティアの人の手も借りて、救出された太鼓を洗う

民の方が喜んでくれて一瞬でも笑顔になってもらえたことがすごく励みになりました」。町民の「がんばれ!」の声がふたりの迷いを吹き飛ばした。

◎「エア太鼓」で練習を始める

このとき演奏したのは『躍動』だった。小中学校で20年近く年間約150人の生徒に教えてきた



平成23年7月10日、震災後初めて轟会メンバー全員そろって女川町総合体育館の前で演奏をした

曲だ。だから、「みなさん、いろいろ思い出したんでしょうね。それまでは意識したことはなかったのですが、多くの人がこの曲に親しみを感じ、私たちの活動を見守ってくれたんだと実感しました」と齋藤さん。

翌日、子どもたちを高台の避難所横のグラウンドに集めた。青空教室を開き、子どもたちの半分はひざ打ちをしてリズムを叩き、半分は空のペットボトルをばちの代わりにして「エア太鼓」で練習を始めた。

生涯教育センターは当初立ち入ることもできなかった。2回遺体捜索が入ったが、まだ奥には流された瓦礫がれきが詰まっていた。5月になり、手前の方なら入ってもいいと許可が出て、大半の太鼓を取り出した。しかし生涯学習課から、太鼓を預かる場所はないので持って帰ってほしいと言われ、齋藤さんの自宅の敷地内に置くことにした。

当時、太鼓は町の備品だったから生涯学習課に修理をお願いしたが、「遺体捜索もまだまだなので太鼓のことまではとても手が回らない。すべて轟会にお任せします」と言われた。

その後、比較的きれいな太鼓を毛布でくるんで大きな音が出ないようにして子どもたちが練習を始めた。すると、避難所から多くの人が出てきて拍手をしてくれた。みんなに温かく見守ってもらっていることを実感した。



平成24年2月11日、まつり応援基金のおかげで被災したすべての太鼓が修理を終えて戻ってきた。感謝の思いを込めて、ピカピカの太鼓を思いきり打ち鳴らす

◎太鼓が支えてくれた

5月30日、石川県の浅野太鼓の人が訪ねてきた。被災地の太鼓グループを回っているという。初対面だったが「うちでできるだけ直します」と言って、中太鼓9台と桶胴太鼓^{おけどう}1台を無償で修理してくれた。担当者の浅野正規さん(40)によると、「太鼓は洗浄して皮を張り替えて修理すれば元のようにきれいになります。修理してお届けすると、そのとき初めてメンバーが全員そろったというところがかなりありました。太鼓を通して人々がつながっていることを感じました」。

多くの未修理の太鼓は日本財団のまつり応援基金で修理することができた。すべての太鼓がそろった平成24年(2012)2月11日、みんなで演奏できる喜びをかみしめた。

地元の若者が立ち上げた団体「女川福幸丸」主催の音楽イベント「GAREKI(我歴) stock in 女川～出航編～」が今年6月2日に開催され、女川潮騒太鼓囃会はトップに出演しました。



讃岐まんのう太鼓の東日本復興祈念コンサートに招待されて演奏した

「震災前は、太鼓が好きだ、楽しい、という感じでやっていましたが、震災後は、こんなに太鼓が自分たちを支えてくれていたんだとあらためて思いました。太鼓がなければこれほど早く立ち直ることもできなかった。太鼓を通して、たくさんのお子どもたちとかかわっていただけるのも幸せなことです。こうして太鼓を続けていけることへの感謝を忘れず、地域に根差し、少しでも地域の復興の役に立ちたいですね」と齋藤さんは力を込めて言った。

轟会の太鼓は女川の人たちの復興への思いをより強くし、町民が心をひとつにするために、これからますます大きな役割を果たしていくに違いない。 (原 章)



オリジナル手ぬぐいを巻いて

■それぞれの軌跡

かわぐちじんじや
川口神社

宮城県亶理郡亶理町



◎「よんによす!」とかけ声をかけ神輿渡御

宮城県亶理郡亶理町荒浜は、一級河川の阿武隈川が太平洋に注ぐ河口にある。東日本大震災では306人の町民が死亡または行方不明となり、大津波によ



文政8年(1825)に建てられた鳥居は大津波に耐えた。下は銅板葺きの屋根だけ残った手水舎。下の右奥に見えるのが本殿、左は神輿堂

る浸水は亘理町の面積の47%に達した。とりわけ荒浜、大畑浜など沿岸地域は壊滅的な被害を受けた。その荒浜地区に、阿武隈川河口の守り神と言われる川口神社がある。

川口神社は、寛永12年(1635)、亘理城主伊達成実てしげざねの勸請と伝えられる。祭神は宇迦之御魂神うがのみたまのかみ、大海津見神おおわたつみのかみなど8柱の神で、航海安全大漁満足、五穀豊穰、健康安産、眼病平癒の神社として信仰を集めている。



平成元年4月の神輿渡御の様子(写真：川口神社)

川口神社の春の例祭は4月20日直近の日曜日に行われる。朝9時半に当番地区の男たちが神輿みこしを担いで出発、「よんによす!」という独特のかけ声をかけながら氏地を巡る。渡邊光彦宮司(67)も神輿とともに歩き、午後4時ごろまでに約120軒の家の前で祝詞をあげる。

神輿は荒ぶるほどご神威が高まるとされるので、神社に戻っても神輿堂の前で半時間くらい揉み合う。このとき「荒浜川口神社神輿納気合歌おさめ」が歌われる。「これは『気合歌』となっていますが木遣り歌です。最初に『ドドゴーセ』と3回言う。それをもう一度繰り返してから、アララー ドッコイー ヤーイ 今日日は日も良し …… 天気も良いし ヨーオイトナー ……」。渡邊宮司は自ら歌ってくださった。

◎まつり応援基金で3基の神輿を修理

平成23年(2011)3月11日、渡邊宮司はいつものように祭りに備えて獅子頭、猿田彦等の装束、太鼓、法被などすべてを取り出し、社務所に並べていた。そこへ地震が発生、すぐに避難し、津波には巻き込まれずにすんだ。それから亘理小学校体育館で避難所生活が始まった。地震から1週間後に神社の様子を見



平成24年4月に行われた春の例祭。神輿は修理中なのでよその神社の古いものを借りた。漁協と仮設団地をまわったが、仮設団地では太鼓の音が聞こえると人が集まってきて、神輿に向かって手を合わせていた



に行く、文政8年(1825)に建てられた鳥居は健在だったが、社務所や自宅は津波に襲われ、瓦礫や泥で中に入ることもしかない。神輿堂にあった大中小3基の神輿のうち中小の神輿は流されて行方不明、1トンある大神輿は横転し、神輿堂の壊れた屋根を支えていた。しかし、本殿だけはまったく浸水していなかった。昭和52年(1977)に子どもの火遊びによる火事で焼失したあと、床を高くして鉄筋コンクリートで再建したのが幸いした。



渡邊光彦宮司と直径約90センチの大太鼓

「避難所で氏子の人から『もうすぐ祭りだよ』と言われても

神輿がないもの。ところが、5月の連休のとき、小神輿が神社の50メートル先で見つかったんです。それを洗って亓理小学校体育館の壇上に安置し、復興祈願と慰霊祭を兼ねて避難所の祭りをやりました」

その後、約200メートル離れた畑で中神輿が見つかった。そして、日本財団のまつり応援基金を受け、3基の神輿を修理し、大太鼓、獅子頭、猿田彦神面、社名旗、法被なども新調することになった。

「祭りは神社の中核です。この祭りがいかに地域に密着しているかということをも日本財団のみなさんに理解してもらえて、本当にうれしかったですね」

氏子の青田和宏さん(59)も言う。「祭りは地域の大切なコミュニケーションの機会です。だから途切れさせてはいけません」

◎神輿は神社の宝

平成24年(2012)4月には2年ぶりに例祭を行い、漁協と4つある仮設団地を



神輿の解体修理には、木地、塗り、金具、金箔などさまざまな職人さんがかかわる。1基の神輿に金具だけでも500～600は使われているという。それを1つ1つ修理し、欠けているものは新調する。左上は塗りを担当する田中一義さん

まわった。神輿は修理中なのでよそのものを借りた。太鼓の音が聞こえると仮設団地の人たちが集まってきて、神輿に向かって手を合わせたり涙を浮かべたりしている。渡邊宮司はその光景を見て、「心にズシンときました。やってよかったです。これからも続けなくちゃ、とあらためて思いました」。

神輿を修理しているのは山形市の株式会社小嶋源五郎である。作業にあたっている田中一義さんは言う。「中小の神輿はかなり壊れていましたが、手の込んだ立派なものでした。神輿は神社の宝ですから、いいものになるように、そして元と同じものになるようにやっています」

大太鼓は樹齢約千年の檜けやきをくり抜いたもので、直径が約90センチある。「戦前から同じくらいの大きさの太鼓があったのですが、昭和52年の火災で焼けてしまいました。そのあとは小さな太鼓を使っていましたが、やはり音が違いま

今年の川口神社の春祭りは4月14日。修理を終えたピカピカの神輿をかつぎ、「よれもこれわいさーのよー。よんによす！ よんによす！」とかけ声をかけながら漁港と4カ所の仮設住宅を巡りました。

すね」と渡邊宮司。

◎川口神社は荒浜の人の心の拠り所

川口神社の被害も甚大だったが、渡邊宮司は氏子の人たちの被害に心を痛める。「この地区では多くの家で家族が犠牲になり、9割以上の人が家を流され、仮設住宅で暮らしています」

青田さんもいま仮設住宅で暮らしている。青田さんのお父さんは川口神社の責任役員と総代会長を務めているが、高齢の上に震災の心労が重なり入院している。渡邊宮司は青田さんがお父さんの役を引き継いでくれることを願っている。青田さんもそれに応えるつもりでいる。

「震災のときは消防団員で、津波が真正面から来るのを見ていましたし、目の前で人が流されるのもしました。でもね、私はここを離れたくないんです。海が好きだし、川口(神社)さんもあるし。川口さんは荒浜の人間の心の拠り所なんです」

とは言え、前途は厳しい。社務所と自宅は使えるようになったが、復興計画で川口神社の前の堤防は7.2メートルの高さにかさ上げされ、その内側に車道と幅2メートルの歩道がつくられる。そのため川口神社も境内が120坪削られ、大津波に耐えた鳥居も撤去させなければならない。

さらに深刻なのは人の問題である。祭りのときに協力してくれる氏子は800軒余りあったが、現在地元に残っているのは数十人。仮設住宅に住んでいる人たちの4、5割が町外移住を考えていて、町内に残る人たちも、多くは山手の高台での新築を希望しているという。そうになると、神社は残っても、氏子は数えるほどしかいなくなる。逆に、祭りを続けることで氏子が戻りやすくなるのだろうか。本当のまちの復興につなげていくためにも、渡邊宮司や青田さんたちが果たす役割は大きい。

(原 章)



大太鼓と獅子頭、猿田彦神面、鳥兜、装束などは佐世保の株式会社民俗工芸で新調された

■それぞれの軌跡

磯部敬神会

福島県相馬市



◎舞い手が集まらず神楽奉納を断念

秋の彼岸の中日となる平成24年(2012)9月22日、相馬市坪田にある雷神社^{らいじんしゃ}で秋の例祭が執り行われ、地域の安泰祈願、五穀豊穡のお礼参りとして神楽が奉納された。2年ぶりに行われた今春の大祭に続いてのお祭りである。

この日、神楽を奉納したのは春よりも1つ少なく5団体のみであった。祭りの当日、村の神楽はそれぞれの地域で舞を奉納した後、雷神社に参集する。獅子の頭を神前に供えて神事が執り行われ、次々と神楽が奉納される。奉納の順序は以前は先着順だったが、現在はくじ引きで決められているという。

「昔は、どこが先に来ていてもウチが1番に奉納したものですよ」というのは磯部敬神会会長の唯野哲夫さん(63)である。日本財団の支援を受け、獅子頭や法被、笛などを復旧してはいるが、現役の舞い手が集まらず、今回の祭りでは残念ながら獅子頭を供えるのみで神楽奉納をすることはできなかった。磯部地



神事では獅子頭が奉納される



平成24年7月30日、明治神宮で執り行われた「明治天皇百年祭」の記念行事に磯部敬神会が招待され、「太刀飲み」など相馬宇多郷の神樂が奉納された(写真：相馬市史編さん室)

区は被災状況が深刻で、集落のほとんどが津波による被害を受け、350軒あった地区そのものが跡形もなく消え失せてしまった。神楽用具はもちろんのこと、家を失い、神楽の舞い手もほとんどが仮設住宅や借り上げ住宅に入っており、中には仕事のために相馬を離れてしまった人もいる。



現在、磯部敬神会の会員数は13名 まつり応援基金によって作られた装束など



平成24年の雷神社の秋の例祭では、御手神楽台敬神会、立谷町敬神会、塚部神楽保存会、日下石敬神会、原釜神楽保存会の5団体によって神楽が奉納された。上は幣束と鈴を持って舞う「鈴舞」(日下石敬神会)、下は後被りが入って激しく舞う「乱舞」(原釜神楽保存会)



だが、全員が別々の地区に暮らしており、集まることもままならない状態が続いている。磯部の神楽を舞うためには、笛や太鼓を含めて最低でも7人必要である。そのため、神楽を舞う日の1カ月ほど前から練習はするけれども、定期的な練習は行われていない。神事に奉納された獅子頭は全部で10頭、磯部地区を含めた5団体が神楽を奉納していないことになる。

◎「太刀飲み」も奉納

朝8時から始まった神事が終わると、社殿の前に組み立てられた二間四方の



この下にかつて350戸ほどの家があった。高さ18メートルのところまで津波に浸かったという鉄塔も見える

舞台上で神楽が演じられる。奉納される舞の演目は決まっており、まず、前被りが身体に幕を巻きつけたまま四方を祓う「四方固め」、次に幣束を手に持ち舞う「幣束舞」、右手に幣束、左手に鈴を持って舞う「鈴舞」、そして最後に後被りが入って激しく舞う「乱舞」からなっている。磯部敬神会の神楽はその後に「太刀飲み」もするので、全部が終わるのに1時間半はかかってしまうのだそうだ。

以前は境内の一角に本舞台よりも少し小さな舞台を作り、奉納を終えた組が「鳥刺し舞」など余興の舞を披露したという。

神社の境内には奉納を待つ神楽保存会関



孫の手を引く住民の男性。子どもたちの胸には線量計が吊るされていた



平成24年4月15日に開催された寄木神社例祭では磯部敬神会の若手メンバーが神楽を奉納した
(写真：相馬市史編さん室)

係者のほか、研究機関、支援団体関係者に混じって数名の観客がいた。2人の小さな子どもを連れた年配の男性は、秋の祭りはないものと思っていたらしい。

「囃子が聞こえたのであわてて孫たちを連れてきました。いつになるか分からないけど、こうした時間がいつか地元と子どもたちをつなげてくれると思うから」

2人の孫は、木の陰からジッと目を凝らして舞台を見ていた。

◎寄木神社例大祭で若手が奉納

震災後、沿岸部の高台にある寄木神社の北の海岸線にあったはずの磯部の集落はコンクリートの基礎だけを残した草の原に姿を変え、高さ18メートルのところまで津波に浸かったという鉄塔だけが残されている。震災の爪痕はまだ



網にかかった古木を寄木大明神として祀る寄木神社

震災で大きな被害を受けた相馬市民会館は現在建て替え中。今年10月の落成式で磯部敬神会が「悪魔払い」の神楽を舞う予定です。「悪魔」は仏教用語で、「悪魔払い」は神楽を伝えた山伏・修験者によってもたらされました。

深く残る昨年の秋、磯部は寄木神社の氏子総代長である佐藤安男さん(65)を中心に「みんなが元気にしているかどうかを確認するためにも春には祭りをやろう」と決めた。

磯部敬神会がようやく神楽を舞えたのは今春4月15日、寄木神社で復興を祈願する例大祭でのことだった。その日、敬神会に所属する若手住民が磯部の神楽を奉納した。仮設住宅に暮らす人々も集まり、鮮やかな衣装で舞う獅子の姿に歓声があがった。

その後、7月30日には「明治天皇百年祭」が東京の明治神宮で執り行われ、その記念行事として被災地の伝統芸能7団体が招待された。相馬を代表して磯部敬神会が相馬宇多郷の神楽を披露することになった。さすがにこのときばかりはと、仕事や生活の事情で動けない若手に代わって引退した保存会のベテラン18名が夏の暑い盛りの3日間を東京まで出向き神楽を舞った。



唯野哲夫磯部敬神会会長(左)と佐藤安男氏子総代長

◎伝統の灯を消さないために

津波の被害を受けた団体にとって、いちばんの問題はその基盤となる地区が消滅してしまったことだと唯野さんはいう。

「小正月には、集落1軒1軒を回って悪魔払いの神楽を舞い、最後には村の四方で舞って絶対に悪魔が入らないようにするというのが伝統でした。この神楽は地域と深くつながった本当に由緒ある神楽なんです。今年はなんとかお祭りができたけど、来年以降もお祭りはしていかなければならないと考えています。あるものを失うのは簡単ですが、失ったものを復活させるのは本当に大変なことだというのが今の実感です。いろいろなことが落ち着いて以前のような形になるにはやはり年数がかかる。あと2、3年は我慢しなければなりませんでしょう。伝統の灯を消すことのないようしっかりと続けていきたいものです」

伝統芸能の復興は、人の繋がりを蘇生させ地域の復興へとつながっていく。相馬の神楽が粘り強く続いてゆくことが地域復活への鍵となる。(赤阪友昭)

■それぞれの軌跡

安達太良太鼓保存会

福島県本宮市



◎安達太良神社に由来する「本宮」

「そいや!」とかけ声がかかると太鼓がドドーンと打たれ、銅鑼^{ドラ}の音がグワーンと響き、「いさみごまだあ!」という叫び声とともに太鼓の演奏が始まった。本宮市^{もとみや}の安達太良神社^{あだたら}の参道鳥居前、宮太鼓4台、桶胴太鼓1台、締太鼓2台、それに鉦や横笛などで演奏するのは安達太良太鼓保存会のメンバー。宮司はじめ多くの人がダイナミックな響きに耳を傾けていた。

福島県のほぼ中央に位置する本宮市は、平成19年(2007)に安達郡^{あだち}本宮町と白沢村が合併して誕生した人口約3万1千人の新しい市である。本宮はかつては奥州街道、会津街道、三春街道が通る交通の要衝であり、宿場町として栄えた。本宮という名称は安達太良神社に由来する。久安2年(1146)創建で安達郡の総



安達太良神社参道鳥居前で奉納演奏する安達太良太鼓保存会のメンバー



安達太良神社の現在の社殿は文化13年(1816)に建てられた

鎮守。毎年10月の第4土曜日をはさむ金・土・日曜日に秋季例祭が斎行される。

◎秋季例祭の裸神輿と真結女神輿

平成24年(2012)10月26日、秋季例祭宵宮の日の夕方、本宮市の目抜き通りには露店が並び、歩行者天国の道路を親子連れや若いカップル、観光客などが闊歩していた。案内してくださった安達太良太鼓保存会の打頭、渡辺徳太郎さん(63)によると、この秋祭りは「本宮方式」と呼ばれ、地元の人々が露天商に頼らず自分たちで200近くの露店を運営しているという。

次第に暗くなる中、たくさんの提灯を取り付けた、先囃子さきばやしと呼ばれる太鼓台の山車がやってきた。本祭りの日には裸神輿で知られる神輿渡御が行われる。さらに、昭



安達太良太鼓保存会の打頭、渡辺徳太郎さんは笛の名手でもある



熱のこもった演奏を終え、ポーズを決める

和62年(1987)から女性が担ぐ真結女神輿が加わり、祭りをいっそう盛り立てている。この秋祭りで、28年前から安達太良太鼓が奉納されている。

◎人づくり、ふるさとづくりの基盤

渡辺さんによると、安達太良太鼓保存会は昭和59年(1984)に創設された。それにはきっかけがある。先囃子の太鼓は昔から続いているものだが、お年寄りによると、以前とはリズムが違ってきている。このままでは伝統的な太鼓がわからなくなるということで、記録を残す町の事業が始まった。同時に、年に1度しか聞くことができない先囃子と違って、いつでも演奏でき、聞くことができる太鼓をつくろうということになった。それは人づくり、ふるさとづくりの基盤となり、地元の活性化にもつながることが期待された。

それではどんな太鼓がいいのか、モデル探しが始まった。有名な太鼓団体も訪ねたが、名人芸的に演奏するものは方向性が違う。そのうち福島県山都町の飯豊権現太鼓を知った。大人数による組太鼓で、このスタイルこそ自分たちにふさわしいということになった。そこで訪ねてみると、飯豊権現太鼓ができる

ときに指導を受けた長野県の御諏訪太鼓に相談することを勧められ、御諏訪太鼓の指導者小口大八先生を紹介された。こうして小口先生の指導のもとで安達太良太鼓が誕生することになった。

ちなみに、渡辺さんは当時本宮町役場でまちづくりに携わっていた。太鼓は打ったことがなかったが、音楽好きだったので参加した。今では日本太鼓財団の福島県支部副会長であり、1級公認指導者でもある。

◎大晦日は安達太良神社で送り太鼓

27日午前10時に先囃子が安達太良神社の参道前を出発したあと、安達太良太鼓の奉納演奏が始まった。この日に演奏された曲を安達太良太鼓保存会の国分義正会長(73)に紹介していただいた。

「最初の曲は『勇駒』で、もっともよく演奏される曲です。次は『飛龍三段返



(上) 本宮方式で市民が運営する本宮まつり

(中) 神輿にもさらしを巻いて渡御する裸神輿。その奥は提灯を灯した先囃子
(下) 100人の女性が担ぐ真結女神輿



安達太良太鼓保存会のメンバー。背広姿は国分義正会長

し』、これは神楽太鼓の一種で、途中で『転禍招福息災延命』という祝詞を唱えます。3曲目は『安達太良^{ねんじり}回禱太鼓』。これは安達太良の神を拝みまわすということで、『岩代之国安達太良山は陸奥の国の靈山として往古より庶民の崇敬を集め、……五穀豊穰、商売繁盛、家内安全、子孫繁栄を太鼓の響きに乗せて……』という口上を唱えます」

「大晦日の夜も安達太良神社の神楽殿で今年の送り太鼓を奉納します。年が明けると宮司さんをご祈禱をされ、そのあと新年迎え太鼓を打ちます」

安達太良太鼓保存会で演奏する曲はすべて新しく創作されたものだ。渡辺さんによると、「これは小口先生のお考えに基づいています。伝統的な太鼓もいつか誰かがつくったものです。新しく創作されたものも50年たてば伝統芸能になっていくのです」。

まちの人たちに伺ってみると、安達太良太鼓はずいぶん人気だ。本宮駅前にあるうなぎの老舗山本家のご主人は、「駅前広場ができたときのお祝いでも演奏してくれました。『飛龍三段返し』とか、見事なもんです」。安達太良神社参道前に住む川名フジコさん(71)は安達太良太鼓の大ファンだという。「演奏が素晴らしいだけでなく、本宮以外の各地で演奏活動をしています。本宮を知ってもらい、本宮の発展のためにもますます活躍してもらいたいですね」

今年6月1～2日、第3回東北六魂祭が福島市で開かれ、25万人の人出でにぎわいました。青森県からねぶた祭り、岩手県からさんさ踊りなど各県を代表する郷土芸能が披露され、安達太良太鼓も本宮市代表として出演しました。



本宮市内を流れる安達太良川と陸奥の国の霊山・安達太良山

◎新しい伝統づくり

安達太良太鼓保存会のメンバーは約50名。稽古は週2回、青田地区公民館で夜7時から9時までやっている。ところが、東日本大震災で公民館の天井が落下しいくつかの太鼓が破損してしまった。そこで日本財団のまつり応援基金の支援を受けることになり、宮太鼓4台と桶胴太鼓1台を購入することができた。

安達太良太鼓保存会の活動は祭りでの奉納、福島県太鼓フェスティバルへの出演のほか、まちのお祝いごと、結婚式などで依頼されて演奏することも多く、海外公演も数えきれない。市内の小中学校で太鼓の指導もしている。

どんなに歴史のある伝統芸能も、最初に登場したときは新しく、しかも他から学んだものであることが少なくない。それが長い時間の中で人々に親しまれ、定着することによって、「伝統」と呼ばれるものになっていく。それは人づくり、ふるさとづくりにもつながる。安達太良太鼓保存会の活動はその過程を見事に体現している。

(原 章)

シシ・トラ・シカの芸能



三陸から福島浜通りにかけて「シシ」に関係した郷土芸能がたくさん伝わっています。中でもライオン系シシ（獅子舞・権現・太（大）神楽・獅子振り・獅子風流・悪魔祓いなど）、虎系シシ（虎舞）、鹿系シシ（鹿踊）が耳目を引きます。

ライオン系のいわゆる獅子舞は、百獣の王獅子を表した頭を持ったりかぶったりし、2人以上が幕の中に入り、おもに正月や祭礼に演じられます。頭そのものが信仰対象でもあり、個人宅に頭があることも珍しくありません。岩手県では山伏神楽が最高神として崇める獅子頭を権現と呼び、黒塗りに金色の目とむき出しの歯が人々を畏怖させます。岩手県沿岸南部から宮城県では、正月・小正月の春祈禱の獅子振りや悪魔祓いといって家々を廻る獅子がみられます。岩手県沿岸北部や福島県に多数伝わるのは太神楽、伊勢のお札を全国に配って歩いた伊勢大神楽の流れをくんでいます。この頭は耳が動くのが特徴で、動きにも可愛らしさが漂います。曲芸も演じ、いかにも幸福を呼び込んでくれそうです。

三陸沿岸を代表する虎舞は、頭などの造りから太神楽が変化したものと考えられます。虎は千里駆けて千里戻るといわれるほど勢いのある動物で、その威を借りて悪霊退散や豊作・豊漁・家内安全などを祈願する芸能として漁師に重宝されました。はしご虎舞などアクロバティックな曲芸もあり、若者たちにも大人気です。

鹿踊は前述の獅子とは由来がまったく別で、東北独自の芸能です。日本では古来より食肉用の獣を総称して「しし」と呼び、鹿は「かのしし」でした。ですから鹿踊は「ししおどり」と呼ばれています。由来は鹿を狩る獵師による供養や感謝が芸能化したなど諸説ありますが、はっきりしていません。

鹿踊は大きく2つの芸態に分けられます。宮城県北部から岩手県南部（伊達藩）の鹿踊は、鹿角を付けた頭をかぶり、太鼓を腰にさげ、背中に3メートルほどの御幣を背負い、8人一組で踊ります。南部藩だった釜石や大槌の鹿踊は、怪異な頭をかぶり、ドロノキをカンナで削ったカンナガラをたてがみに見立て、体を覆った幕を操って踊ります。いずれも盆供養や豊穡祈願を目的として踊られています。

小岩秀太郎（公益社団法人全日本郷土芸能協会）



藤波祥子宮司と尾形武寿理事長。八重垣神社仮本殿前で

鎮守の森の復活——神社は心の拠り所

対談◎ 藤波祥子 八重垣神社宮司 × 尾形武寿 日本財団理事長

1200年前にご鎮座

尾形 こちらの神社はどのくらいの歴史があるのですか。

藤波 大同2年(807)ご創建ということで、平成19年(2007)にご鎮座1200年祭をしました。徳逸^{とくいつ}大師というお坊さんが、何かしらここにお祀りしたのが始まりということです。そして600年ぐらい前に、藤波の初代が京都からこの地の按察使^{あざち}(地方行政を監督するために置かれた官職)として視察に来て、ここに居着きました。そのとき、すでにかお祀りされていたのを改めてお祀りしたのか、あるいは新たに神様をいただいてきたのか、はっきりしないのですが、ともかくそれ以来、代々繋いでできました。

尾形 立派な社殿だったんでしょう？



藤波祥子宮司

藤波 津波で流されたご社殿は200年から250年ぐらい前に建てられたもので、山元町の指定文化財でした。ここはご祭神が素戔鳴尊すさのおのみことです。それで、素戔鳴尊が小刀を持って、八岐大蛇退治やまたのおろちをしているところを彫った見事な彫刻がありました。

堤防を造るより木を植えよう
尾形 氏子さんは代々こちら

に住んでいる方が多いのですか。

藤波 そうですね。もともと漁業に携わっている方が多かったです。それが陸に上がって、イチゴをつくったり、最近はサラリーマンの方もいらっしゃいました。

ですから、神様に対して、理屈ではなく、肌で感じている。まだ皆さんが避難所にいるとき、高台の人に、「神も仏もないね、こんなに なっちゃって」と言われたことがあるんです。それを地元のおじいさんに話したら、「神も仏もないなんて言うやつは、震災前から神も仏もないんだから、相手にすることはないよ」と言われて、「なるほど」

と思って。

今年のお正月も大勢お参りに来ていただきました。ある組織のトップの方は、「去年は1日も休まないで、働きづめに働いた。復興、復興と言うけれど、心の拠り所よこしろがここにちゃんとあるんだから、そんなに急がなくてもいいんだよ



震災前の社殿(写真：森安江/フォトラベル)

な」とおっしゃってくださった。八重垣神社の氏子であることを、皆さん、誇りに思ってくださいっていたようで、ありがたいと思っています。

尾形 たしかに神社は心の拠り所ですね。それで私たちも鎮守ちんじゅの森復活のお手伝いをしようと思ったのです。

藤波 「鎮守の森」といえばこんもりした森というイメージ



尾形武寿理事長

がありますが、ここは松など

の針葉樹が主でしたから、こんもりではなかったのです。さらに、道路やお堀を造るために木を伐られ、ますます森が薄くなっていったので、植樹しなくちゃいけないなと震災前から思っていました。そのころ宮脇昭先生みやわきあきらのご本を読ませていただいたんです。そこで、植樹のお話があったとき、すぐに手を挙げました。

いま各地で高い堤防を造る計画が進んでいますが、堤防って、水を一滴も通さないぞという感じですね。でもそれは無理なことで、宮脇先生がおっしゃるように、少しずつ水を通してやって、大難を小難ですませるみたいな考え方が自然に適っていいと思うのです。ですから、堤防を造るより木を植えて、少しでも被害を防ぐという考えに私は賛成です。

尾形 千年に1回の津波なんだから、そのときは逃げればいいんです。流されたら、また新しいのをつくれればいい。そこに新しい文化も生まれてきます。

藤波 私もそう思います。

尾形 宮古市だって、千年に一度の津波に備えて「万里の長城」と呼ばれる大防潮堤を造りました。ところが、そんなものはあつという間でした。

藤波 自然の力を侮あなどっていますよね。私もたかだか50数年生きてきた中で、チリ地震津波がありましたし、昭和55年ごろにもここまで海の水が上がってきたことがある。母もここで生まれ育った人ですが、お祭り用品を全部海に持って

八重垣神社 植樹祭

平成 24 年 6 月 24 日、八重垣神社

事業協力：(一財)日本文化興隆財団、
後援：(宗)神社本庁、(宗)宮城県神社庁



左から藤波祥子宮司、宮脇昭横浜国立大学名誉教授、
尾形武寿理事長、田中恆清神社本庁総長、千葉博男宮
城県神社庁長

この日植えられたのはシイ、カシ
など21種類約3,300のポット苗



参加者全員、心を込めて苗を植える。左下は田中恆清総長と宮脇昭名誉教授



近くにはまだ瓦礫の山が見える



植樹祭には地元の方や東北地方の学生ボランティアなど約500人が参加した



苗を植えたあと、仮本殿に参拝



班ごとに寄せ書きが作られた



鎮守の森が復活するのを待つ八重垣神社

行かれた経験を何度かしています。だから、ここはしょっちゅう津波に遭っているんです。中には、「なんで津波で流されたところにまた建てるの」と言う人もいますが、先祖の方が1200年居続けたのにはそれなりの意味があるので

しょうから、「やっぱりここに再建しよう。逃げるわけにはいかない」と思って。

海に入るお神輿

尾形 石巻いちはらに一皇子宮いちおうじのみやという神社があります。後醍醐天皇ごだいごの皇子みこの護良親王もりよしをお祀りしています。春の大祭でお神輿みこしが出ますが、そのお神輿は掛け声をかけないんです。太鼓と鉦かねが「ドン、チャーン」とやって、稚児行列わらわがあり、その後ろからお神輿みこしが来る。全員白装束で、布をマスクのようにして、烏帽子えぼしを被って。夜になると長浜という遠浅の海岸で海に入ります。

藤波 ここもお神輿みこしは白装束で海に入ります。でも、声はしっかりかけます。まず海に入って褌みそぎをして、氏子区域うぢこを練り歩いていました。

去年もまず海に行きました。その浜には「立入禁止」と書いた立て札があるんです。警察の方にだめと言われるかな、と思いながらその横を通って入ったら、何も言われなかった(笑)。浜降り神事をして、海に入って、波打ち際を担いで練って、その後、ここの氏子さんが多くいらっしゃる仮設住宅に行きました。すると、こっちまで足を運べないお年寄りの方が大勢待っていてくれて、涙を流しながらお神輿みこしさんを拝まれました。

ここの夏祭りは、中学生たちのメイン・イベントです。特に宵宮では女の子

はっきり気合を入れて浴衣を着てきて、それに男の子がくっついてくる。元は旧暦の6月14日、15日だったので、お月様が明るく煌々と照らす下で、男女がここで出会って、月明かりの中を海までデートして、それで結ばれた(笑)という方がけっこう多いんです。

今年も、娘さんたちは浴衣を着ていらっしやっただ。たぶん親御さんが車で送ってこられたのでしょう。今は仮設に住んでいる方も多し。仮設にいるとどうしても気持ちが重い部分があるでしょう？ ここに来て屈託なく笑っている顔を見て、やった甲斐があったなと思ひました。



修理された神輿

お神輿も、新しいのにしたらいいじゃないかという話もあったのですが、担ぐ人にとってはやはりこの神輿がいいんですね。

尾形 お神輿は無事だったんですか？

藤波 瓦礫に埋もれて悲惨な状態で見つかりました。大工さんに見せると、「藤波さん、これは新しいのを買うくらいかかるかもしれないよ」と言われましたが、「新しいものじゃなくて、この神輿に価値があるんだから、直してください」と頼みました。

森があれば神様は住みやすい

尾形 八重垣神社は鎮守の森復活の第一弾でした。当時、被災されて、鎮守の森どころじゃない、社殿もまだだし、という宮司さんが多い中で、真っ先に「やりましょう」と手を挙げてくださったのが、藤波さんでした。

藤波 私は「それはありがたい。やります」という感じでした。だって、社殿は建てようと思ったら1年とかで建ちますが、森はそうはいきませんね。そこで、先に森でしょうと思って。これは極論ですが、たとえ社殿がなくても、森があれば神様は住みやすいと思うんです。

尾形 それはそうですね。

藤波 本来、神道は、そのつど神様をお呼びして、お祀りをして、お帰りをいただくという形でした。でも、人間って勝手だから、お社を設けて、神様にいつもいていただくようになりました。

尾形 日本は八百万の神で、すべてに神様が宿るという考え方ですからね。私の実家は石巻で漁業をやっていますが、やはり信仰心はとても厚いです。1年の仕事始めには、鹽竈神社しおがまと金華三山、丸山神社にお参りをして、船を清めてから漁に出る。1年間の操業が終わったときにもお礼参りをしていました。

何も無い空間に手を合わせ

尾形 震災のときはどうされていたのですか。

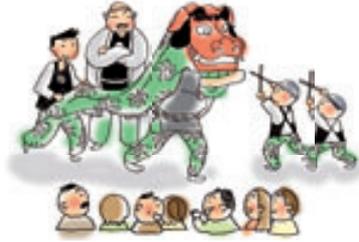
藤波 実は秋田にいたのです。震災から9日目ぐらいにようやく戻ってこれました。でも、様子はみんな聞こえていて、だいたい分かっていました。ここに来てみて、聞いていたとおり、きれいさっぱりさらわれたなと思いました。ただ、砂漠のような更地になっているというイメージだったんですが、たくさんの瓦礫がれきが山になっていたので、最初は、これをどうやって片づけたらいいんだろうと思いました。そうしたら大崎八幡宮の小野目博昭宮司が職員さんを連れてきて、社殿の跡地だけでもということで、自ら重機を動かして瓦礫を退けて、参道も通れるようにしてくれました。

そのころから、参拝の方がぼつぼつとみえるようになりました。その方たちが壊れた瓦を拾ってきて正面に置いて、そこにお賽銭をあげて、社殿も何も無い空間に向かって手を合わせていかれるのです。すごいなと思いました。私以上に信心深い。だから、やっぱり形あるものじゃないんだ、こういう人たちがいれば私もやっていける、と心を強くしました。

尾形 最初の植樹祭を藤波さんとご一緒にきて本当によかったです。

(平成25年2月13日、宮城県亶理郡山元町・八重垣神社にて)

神楽——祈りの芸能



古来、日本では山や岩、滝、大樹などに神霊が宿ると考えられました。そこで、祭壇を設けてその神霊をお迎えし、供物を供えて神霊と人と共に楽しみ、また神霊をお送りする神まつりが各地で行われていました。そのときに行われた歌や舞いが神楽の起源と言われています。

神楽と言えば天岩戸あまてらすのおみかみの話の思い出す方も多いでしょう。天照大神が天岩戸に隠れてしまったため、世の中は真っ暗になります。そこで天鈿女命あめのうずめのみことが神がかりして舞うと、神々がどっと笑います。不思議に思った天照大神が天岩戸を少し開けて覗いたところ、手力男命たぢからおのみことがその手をとって引き出し、光が戻ります。これが神楽のはじまりとよく紹介されますが、もちろん神話上の話です。「かぐら」という言葉は「神座かむくら」から来ていると言われます。「神座」は神の宿るところ。それがいつのころか「かぐら」という音になり、「神楽」という字を当てて、そこで演じられる歌舞を指すようになったようです。

神楽は大きく宮中の御神楽みかぐらと民間の里神楽さとかぐらに分けられます。里神楽はさらに巫女神楽みこ、出雲流神楽、伊勢流神楽、獅子神楽などに分類されます。巫女神楽は神社で祈禱や奉納をする際に巫女が舞うもの。出雲流神楽は場を浄める舞いと神話などを元にした演劇的な舞いがセットになったもの。伊勢流神楽は釜で湯を沸かす湯立を伴うもの。獅子神楽は獅子舞を主体にした神楽です。しかし、各地の神楽はそれらが混ざり合ったものが多く、このように単純に分類することはできません。

東北は獅子神楽系の神楽が多いようです。これはもともと修験道の山伏が伝えたものとされ、多くは獅子頭をご神体として各地を巡りながら舞い、悪魔ばらい、火伏や息災延命の祈禱などを行います。

神楽は土地の信仰と深く結びついているものが多く、地域社会と密接なつながりがあります。舞い手は身を浄め、敬虔な気持ちで舞うものとされ、それを見る人々も、楽しみながらも祈りの気持ちを忘れません。

原 章（編集工房レイヴン）

大槌町の郷土芸能

碓川 豊 岩手県大槌町長



岩手県陸中海岸国立公園のほぼ真ん中に位置する大槌町は、東日本大震災の津波により多大な被害を受け、前町長を含め1,000人を超える町民の生命と数多くの財産を失ってしまいました。

郷土芸能団体の多くが津波の被害を受けた市街地にあったことから、道具や山車が流され、さらには津波の後の火事で焼失してしまいました。古くからある町指定文化財の獅子頭も流失し、大切な文化財も目にする事ができなくなりました。

伝統文化にご理解のある日本財団様は震災後早い段階から、郷土芸能団体に対して多くのご支援にご尽力いただいたと聞いています。なくなった道具等を平成23年(2011)秋までにそろえることができたことから、神社境内だけではありませんでしたが、祭りを挙行し、町民に明るい希望の光を届けることができました。これも日本財団様をはじめとした国内外の皆様からの暖かいご支援の賜と感謝申し上げます。

8月のお盆には帰省しなくても、9月のお祭りには帰省する方もいるほど、大槌町民はお祭り(郷土芸能)が大好きで、郷土芸能が心の支えとなっています。平成24年秋のお祭りは、コースこそ例年と異なりましたが、お神輿みこしが町中を練り歩き、郷土芸能団体がそれに続くといった、震災前に近い形で開催できるまでになりました。

さらに、平成24年12月には大槌町郷土芸能保存団体連合会が設立20周年を迎え、記念式典を開催し、今年の2月には震災以来初となる2年ぶりの大槌町郷土芸能祭を開催いたしました。町民をはじめ町外からも駆けつけた多数の方々に、復活した郷土芸能を観る機会を提供できたことは、大槌町の復興に向けた一歩であると確信しています。



平成24年9月23日、小鎚神社の祭典で神輿渡御が行われた。津波に襲われた大槌町旧役場の前でも鎮魂の祈りを込めて郷土芸能が奉納された。写真は臼澤鹿子踊の皆さん

各郷土芸能団体の構成員も被災し、中にはお亡くなりになった方もいらっしゃいますが、郷土芸能は先祖代々脈々と受け継がれ、生き残った大槌町民の中に生きています。

今後復興が進み、大槌町は外見は生まれ変わりますが、伝統文化である郷土芸能は変わらずに残ります。

大槌町民憲章の一文にこのようなことを謳っています。「香りたかい郷土の文化をそだてましょう」。文化に親しみ育て、継承していく環境を創ることは、われわれの重要な責務であります。

皆様におかれましては、大槌町の伝統文化をご覧いただく機会があれば幸いですと思います。

大槌町の復興に向けて、暖かいご支援ご協力を今後ともよろしく願いいたします。

(いかりがわ ゆたか 昭和26年生まれ。昭和44年、大槌町役場入庁。「第17回全国豊かな海づくり大会」推進室推進係長、総務課長等を経て、平成22年、町職員を退職、平成23年町長に当選、現在に至る)

鎮守の杜の復旧・復興を

小野目博昭 大崎八幡宮宮司



私の奉務神社、大崎八幡宮の御社殿は国宝建造物として文化財に指定されていますが、平成12年より同16年の5カ年をかけて平成の大修理を行い、東日本大震災でも大きな被害はありませんでした。

震災の翌日から、強い余震が続くなか地域の一次避難場所となっている小中学校へ水の供給を行い、備蓄用のLPGガスボンベの貸出等を行っていましたが、沿岸部神社界の状況が気がかりで、旧職員や同僚神職の安否確認と被災地域への支援物資の搬送を行うこととしました。

宮城県北部沿岸部は浜ごとに小さな集落があり、海岸沿いの道路で結ばれていましたが、集落の家々は津波によりことごとく倒壊破損し、避難している方々は高台にある個人住宅に20人、30人と身を寄せ合って住んでおられました。

支援物資搬送の往復の際、集落ごとに鳥居と石段があることに気付き、そのつど石段を登ると御社殿は傾き建具は外れ、石垣が崩れ、倒壊寸前の御社もありました。中には大きな被害が確認されない御社殿もありましたが、いずれも眼下には瓦礫がれきとなった家々が折り重なり、瓦礫が撤去された現在では、人影がまったくなく、荒野と化した光景が続いています。

それぞれの地域にはそれぞれの文化があったはずで、地域の神社は地域コミュニティの中核であり、鎮守の杜(神社)を中心に人々は絆をつくり、おまつりや年中行事を通じて地域社会の結束を確認しながら歴史をつくりあげてきたはずで、

将来に夢が持てる復興計画がぜひとも必要であり、地域の文化を継承するためにも、仮設住宅でバラバラの生活を余儀なくされている方々が一緒になれる環境の整備と施策が急務です。

わが国の宗教文化を考えてみると、キリスト教は個人の宗教、仏教は家の宗



(上) 東松島市宮戸月浜、
五十鈴神社を望む
(下) 五十鈴神社より海側を
望む

教、そして神社神道は地域社会の宗教です。

このように、神社は「地域の精神文化」ですが、行政の復興計画の中であって、政教分離の高い壁に遮られ、無人となった集落の片隅で独り取り残されています。

地域の結束、復旧・復興を

考えたとき、わが国の歴史的な精神文化である神社を祀ることがぜひとも必要です。神々を祀り、地域の祭りを行うことが欠かせないのです。

この度、日本財団が早々に深謀遠慮され、沿岸部被災地域の復旧・復興のために伝統芸能や地域文化の再生に大きく寄与されたことは同慶の至りではありません。

東日本大震災発生から3年目を迎えようとしている現在、暮らしの再建や環境の整備とともに伝統芸能やまつりの場となるべき「鎮守の杜」(神社)の復旧・復興も果たさなければなりません。

(おのめひろあき 昭和25年生まれ。仙台市青葉区八幡鎮座、大崎八幡宮代表役員宮司。昭和50年東北学院大学経済学部商学科卒業、昭和52年、國學院大學神道学専攻科修了、同年、鶴岡八幡宮奉職。昭和56年、大崎八幡宮禰宜拜命。昭和62年、同宮司就任)



民俗芸能ノチカラ

橋本裕之 追手門学院大学地域文化創造機構特別教授・
岩手県文化財保護審議会委員



平成14年(2002)にフジテレビ系列で放送された人気テレビドラマ『恋ノチカラ』は、30代の女性が転職を契機として、諦めかけていた仕事や恋愛を取り戻すストーリー。「この世に生まれて30年と6ヶ月19日。もう恋をすることなんて、ないだろうと思っていた」という主人公のセリフによってもよく知られている。このセリフをもじっていえば、「東日本大震災が起こって約2年。私自身も当時はもう民俗芸能をすることなんて、ないだろうと思っていた」のかもしれない。

東日本大震災が発生した当時、私は盛岡大学で教えており、岩手県文化財保護審議会委員を務めていた。といっても何をしたらいいのかわからなくて途方に暮れていた私は、新入生向けの講義において衝撃的な出席カードに出会う。それは陸前高田市出身の千葉優さんが提出したものであり、「高田町の、川原祭組で秋葉権現の獅子舞をしていました。頭が流されたか、壊れたはずです。地元の間人は探す余裕がありません。助けてください」という切迫したメッセージが書きつけられていた。

以来この出席カードに突き動かされて、私は岩手県沿岸部の民俗芸能を支援するため、自分でも思い出せないくらいさまざまな活動に従事してきた。それは岩手県沿岸部の民俗芸能が地域社会を再生させるさい欠かせない要素の1つであり、そこで生きる人々にとって気高いものとして存在している消息に気づかされたことに由来している。私が民俗芸能を支援する活動にかかわった理由は、被災した民俗芸能が元の姿を取り戻して、悦ばしい何かとして再生することに役立ちたいと思ったことに尽きるだろう。

こうした活動は現在も進行中であるが、その課題を要約しておけば、第1段階は用具を購入する資金を助成すること、第2段階は用具を保管したり練習し



陸前高田市川原秋葉権現獅子舞(平成24年1月15日撮影)

たりする仮設の空間を確保すること、第3段階はメンバーが地元で働ける雇用環境を整備することである。現在も諸段階は重層的に同時進行している。用具や空間を提供することができたとしても、働き口がなければ地元に住むことはできない。人間がいなくなってしまうたら、民俗芸能を続けることもできないのである。

岩手県沿岸部の民俗芸能は無形民俗文化財というよりも、人々の生きがいや喜びとして享受されてきた。しかも、地域社会に育まれるものとしてのみならず、地域社会を育むものとしても演じられていた。地域社会を紡ぎ出す契機といってもいいだろう。東日本大震災以降に限っていえば、鎮魂や供養という意味が再認識されたことはいうまでもないが、民俗芸能は地域社会に入った深く鋭い亀裂を縫い合わせて、傷ついた地域社会を再生させる契機としてこそ演じられているのである。そして平成24年(2012)1月15日、川原秋葉権現獅子舞は天に向かって力強く演じられた。民俗芸能ノチカラ。

(はしもとひろゆき 1961年生まれ。早稲田大学第一文学部卒業、同大学大学院博士課程中退。盛岡大学文学部教授等を経て現職。追手門学院大学社会学部教授等を兼任。専門は演劇学・民俗学。著書に『王の舞の民俗学的研究』『演技の精神史——中世芸能の言説と身体』ほか)

復活した手踊り

紺野 薫 相馬市教育委員会生涯学習課主幹



東日本大震災により相馬市内でもっとも被災したのは磯部地区でした。亡くなった市民の過半数が、また全壊した家屋の3割以上が、磯部地区に集中するという悲惨さでした。

このような状況にあって、磯部敬神会は各方面のお力添えをいただき、震災の1年後には地元の寄木神社の春季例大祭で神楽を奉納するまで、みごとな復活を遂げました。

また、磯部神楽を見て育ってきた子どもたちも手踊りを復活させ、地元の大きな励みになったのです。

そのきっかけは、震災から半年が経過した平成23年(2011)9月、磯部中学2年生の女子生徒が体験学習で私の職場(市史編さん室)へやって来たことでした。いろいろ話をする中で、4年前に行われた地元の祭り「稲荷・寄木・金比羅三社第56回遷宮祭」に彼女が参加していたことが分かりました。



平成23年11月、文化祭の集合写真

そのときの調査で撮影したビデオや写真を見ると、おそろいの可愛らしい衣装を着て楽しげに踊っている小学4年生当時の彼女が写っていました。たいへん懐かしく喜んでもらえましたが、反

面、もうすっかり壊れてしまったかつての風景も写っており、辛い記憶を蘇らせてしまったかもしれません。

彼女が持ち帰った話が契機となって、文化祭で手踊りを披露したいという話が、後日、学校から届きました。聞けば、手踊りは亥年毎に行われる遷宮祭の度に、地元のお



平成19年3月、遷宮祭の一場面

年寄りが子どもたちに教え伝えてきたのだそうです。しかし、先生役のお年寄りの中には津波で亡くなったり遠くへ避難した人も少なくなく、頼るものは当室にある映像記録ということになったようです。

子どもたちは4年前の勘を取り戻しながら1カ月間の練習を重ね、本番では素晴らしい手踊りを披露してくれました。衣装は流失してしまい、各々が持ち寄った不ぞろいの浴衣姿になりましたが、気持ちのこもった立派な舞台でした。市内外の仮設住宅や避難先から文化祭に集まった多くの磯部住民は、目を細めて手踊りを見詰め、子どもたちからもらった元気と感動を口々に語り合っていました。

見る者の心をひとつに結ぶ神楽や手踊りに、地域の暮らしを長年支えてきた民俗芸能の力強さを見ました。地元を離れ、住む場所がバラバラになっても、民俗芸能が心の拠り所となって生まれる一体感、この感覚は絶やしてはいけない日本の文化です。民俗芸能は震災で壊れかけた地域コミュニティをつなぎ止めて、郷土に誇りを持たせてくれます。まさに地域の宝です。

(こののかおる 1962年生まれ。立正大学文学部地理学科卒。相馬市教育委員会生涯学習課主幹。現在、市史編さん事業担当6年目)

みこしがつなぐ被災地と住民

原口靖志 河北新報亙理支局記者

宮城県南部の沿岸部にある亙理^{わたうり}、山元両町。東日本大震災で甚大な津波被害を受け、合わせて950人近くの住民が犠牲となった。荒涼とした光景が広がる被災地で、長い歴史を誇る2つの神社が奮闘している。昨年、伝統の祭りが震災後に初めて復活。勇壮なみこしの姿が、傷ついた被災住民の心を癒やした。

「ヨンニョス」。みこしを担いだ男衆の掛け声が響くと、自宅から次々と住民が飛び出した。「懐かしい」。みこしを囲み、ありがたそうに拝んだり写真を撮ったりした。昨年4月15日、亙理町荒浜の川口神社で350年以上続く春季例祭。被災して地元を離れた住民にも楽しんでもらおうと、みこしが町内4カ所の仮設住宅を練り歩いた。

「仮設の住民がみこしを見て『川口さんが来てくれた』と喜んでくれてうれしい。離れていても、みこしが地域と住民をつないでいる」。同神社の渡邊光彦宮司(68)はそう振り返る。



亙理町の中央工業団地仮設住宅を巡行する川口神社のみこし 元のみこしは山形市内で

阿武隈川の河口近くにある同神社は津波で約1メートル浸水。社殿や社務所、3基あったみこしが損壊した。伝統行事の危機を全国の支援の輪が救った。昨年の例祭は茨城県つくば市の八坂神社からみこし1基を譲り受け、日本財団も修復費約1200万円分を寄贈した。

修復中で、ことし4月14日に予定する例祭までには戻る見込み。渡邊宮司は「本来のみこしが新しくなって戻ってくる。住民は相当感動してくれると思う」と帰還を待ちわびる。



山元町の八重垣神社が震災後初めて行った、みこしを担いだ男衆が海に飛び込む「浜降り神事」

大同2年(807)創建とも伝えられる山元町高瀬の八重垣神社でも昨年7月29日、伝統の「浜降り神事」が復活した。白装束に身を包んだ男衆がみこしを担ぎ、横飛びするような独特な足取りで巡行。神社から約200メートル先の笠野海岸に着くと、みこしとともに海へ飛び込んだ。

みこしを肩に荒波にもまれる男衆の姿を、避難先から集まった住民らは懐かしそうに見守った。津波で自宅やイチゴ畑が全壊した担ぎ手の男性も「再びみこしを担げる日が来るとは思わなかった」と感慨深げだった。

由来は不明だが、漁師の海上の安全を祈るために古くから行われていたという。藤波祥子宮司(57)は「神さまが海に入る大事な行事」と話す。

神社は津波で社殿などが全壊し、みこしも約300メートル流された。約300戸いた氏子も被災してバラバラになった。「多くの命やものをさらった海に再び神さまを入れていいのか」。悩み抜いた藤波宮司だが、避難生活を送る氏子らの熱望を受けて復活を決意した。「住民の過去の思い出と祭りは密接につながっている。地元を離れて暮らす被災者の最後のよりどころなんです」。藤波宮司はそう強調する。

両社とも社殿の修復や相次ぐ氏子の転居など、置かれた状況は厳しい。それでも、住民が暮らした証を残すため、被災地にとどまり続ける。

(はらぐち やすし 1972年、岐阜県出身。日本福祉大学から1994年に河北新報に入社。秋田総局、山形総局、スポーツ部などを経て、2012年4月から新設の亘理支局に赴任。宮城県亘理、山元両町で取材活動を行う)

東北の祭り・ 民俗芸能と太鼓



ご存じのように、平成23年（2011）3月11日に東北の太平洋沿岸部を突如襲った大津波に呑み込まれた祭りや民俗芸能は少なくありません。衣装や仮面、虎頭、太鼓など失ったばかりか、悲しいことに演者さえも波にさらわれたところがありました。

東北地方は祭りや民俗芸能、あるいは年中行事、また民謡などに恵まれた土地です。そしてそのすべてに太鼓が欠かせないと言っても過言ではありません。たとえば、青森市の「ねぶた囃子」、盛岡市の「さんさ踊り」、早池峰山麓の「山伏神楽」、陸前高田市の「けんか七夕」、仙台市の「秋保田植踊」、いわき市の「じやんがら念仏」など、どれをとっても太鼓がなくては成り立ちません。しかも太鼓は祭りや芸能にあって大変に個性的で、その祭りや芸能を囃す中心的な役割を担っています。

「はやす」ということは「魂はやし」という言葉があるように、魂を分割して増やすことです。太鼓の中には魂が包み込まれているのです。「鼓」とも「皷」とも書かれますが、「つつみ」即ち魂の「筒身」「包身」であるのです。

筒が太いので普通は「太鼓」と書いて「タイコ」と読んでいますが、本来は「ふとつつみ」です。「太」は「太陽」とか「太一」、あるいは「皇太后」「皇太子」などにかがえるように、尊厳を言い表す場合に使われています。太鼓は単に打音を出す道具ではありません。

戦後派の新興太鼓は太鼓音楽として発展展開していますが、郷土愛の精神にあふれています。やはり郷土を、ふるさとの人の魂をはやすのです。

西角井正大（日本大学大学院講師）



獅子頭を前にして、祭りや神社の役割について語り合う。
左から笹川陽平会長、千葉秀司宮司、大和久男代表

戻ってきた結束力！

祭りの求心力こそ接点

鼎談 ● 千葉秀司 葉山神社宮司
大和久男 名振新生会代表
笹川陽平 日本財団会長

東日本大震災で多くの伝統芸能保存会や地域社会の要である神社が被災した中で、祭りの再開に向けて立ち上がった地域もある。地域にとって祭りが持つ力とは何なのか、そして若者は祭りを通じて地域とどう向き合おうとしているのか。まつり応援基金が果たした役割も含め、宮城県・雄勝町にある葉山神社の千葉秀司宮司、同町の名振新生会・大和久男代表、日本財団の笹川陽平会長に話し合ってもらった。(司会は日本財団公益チーム 枡方瑞恵)



笹川陽平会長

◆ 復興に取り組む中で、地域における祭りや神社の役割をどう思いますか。

千葉 雄勝町には小さい集落ごとに神社が1社ずつあります。私も12の神社を兼務しています。小さい集落でもちゃんと神様をお祀りして、必ず年に1回は地域を挙げて例祭を行っていました。小さい集落でも全世帯が集まる機会は少なく、お祭りはコミュニティのつながりを深める大事な場です。

笹川 宮司さんは何と言っても故郷の中心だから、そういう機会は大変重要ですね。

◆ 祭りの再開を考えたきっかけは？

大和 初めは漁業を再開しなければという思いでいっぱいでした。でも、やっぱりお祭りの時期が近づいてくると、自然と「今年はどうするか」という話になるんですよ。これまでは毎年やってきたわけですから。ただ、すべてなくなりましたからね。どうすれば復活できるのかまったく分かりませんでした。そんなとき、宮司さんとも相談して、日本財団さんから支援してもらうことになりました。当時は「本当にやれるのか」という思いでいっぱいだったんですが、今年は、集落を出て行った人たちに対しても、残った自分たちがやったぞと胸を張れるお祭りができました。

◆ 芸能に関する日本財団の支援をどこで知ったのですか。

大和 宮司さんからです。どこまで支援してもらえるか分からなかったんですけどね。たとえば、うちの山車には鯨鏝しやちほこが付いているんです。山車だけでは元



千葉秀司宮司と大和久男代表

通りにならないから、鯰鉾もなんとかほしいと伝えたのですが、本当に復活できるか不安でした。

笹川 支援が決まった後、一気に準備が進んだそうですね。でも相当の人が県外に出てしまって人手が足りなかったのではないですか。

大和 昔からの風習で、お祭りの時は必ず皆が戻ってくるんです。今年も、総代長は人が集まるか心配していたんですが、私はまったく心配してなかったです。

◆ お祭りはどのようなものですか。

大和 震災前は4地区に分かれ当番制で準備をしていました。お正月が明けるとすぐに地区全員が準備に取りかかるんです。でも今年は全員でやりました。

笹川 全員でやるんですか。そりゃたいしたもんだ。

◆ 祭りの際の「おめつき」という伝統行事について教えてください。

千葉 いざなみのみこと伊耶那美命が火の神を生んだとき体が焼かれて亡くなったため、いざなぎのみこと伊耶那伎命が怒って火の神を斬ってしまうという神話から、火伏祭りで火の神を祭る

地区民が夫婦神に申し訳ないということで、男女の和合を題材にして夫婦神も崇めることから始まりました。

笹川 五穀豊穡の祭りですと、須佐之男命^{すさのおのみこと}が殺してしまった大宜都比売^{おおげつひめ}から米、粟、麦、大豆、小豆、いわゆる五穀の芽が出てくるという話が『古事記』に出てきますよね。

大和 いや、この祭りは火伏せ祭りなんです。先ほどの鯨鉾にも火を食い止めるという意味があります。しかし「おめつき」の内容から、今は子孫繁栄という意味もあるでしょうね。

千葉 名振地区は雄勝町の中でも特に寒い地域で、例祭日の1月24日は雪の年もあるくらいですが、今年は信じられないくらい暖かくて、皆が祭りの最後の最後まで残り、とても盛大に行うことができました。

◆ 伝統芸能の支援は地域復興にとってどのような意義を持つでしょうか。

笹川 復興支援というと物の支援が重視されがちです。建物を建てたり道路を直したりね。それはもちろん大事なことだけれど、天災でいちばん傷付くのは人の心なんです。それを治すには、やっぱり希望がなければいけない。家が流されたり、家族が亡くなったりして心が痛んでいるのだから、まず心を元気にしたいと考えたんです。ご承知のとおり、被災後、「絆」という言葉が日本中で使われました。絆はお祭りで集落の皆さんが、宮司さんの下でそれぞれ役割分担する過程で培われていくものです。神社はコミュニティのヘソみたいなものです。そこで祭りが行われなかったら住民がひとつの目標に向かって力を合わせる機会はなくなるわけで、心の復興には祭りの復興こそいちばん重要だと考えたわけです。

大和 そのとおりです。さっきも言いましたが、祭りがあるから皆が集まるんです。地区の出身者は全員来るんですよ。こういうときしか来られない人もいますからね。顔を合わせ元気だったかと声を掛け合う。

笹川 おじいさん、おばあさんが孫に踊りや笛を教える習慣も代々続いているし、大人になって他府県に出ても、子どもころのそうした思い出を頼って戻ってくるわけですよね。だから祭りは続けないといけない。

千葉 そうですね。地域を離れてしまった人がいちばん帰りやすいきっかけと



「おめつき」は宮城県指定無形民俗文化財。雄勝町名振地区に天明3年(1783)から続くとされる火伏せ祭りの一環として各契約講中が集落4カ所で演ずる演芸。社会問題などを題材に、男形、女形の道具を用いた劇などをおもしろおかしく演ずる。「俄(にわか)に似た地狂言の即興劇で、現在では全国的にも数少ない貴重な行事(写真：東北歴史博物館・小谷竜介)

なるのが祭りだと思います。今後も継続していきたいと思います。

◆ 大震災後、祭りを通して地域の結束が強まったということでしょうか。

千葉 こういう状況でも、自分の地域にまた家を建てようと思ってきた人たちの結束は強まりましたね。一方で、出ざるを得なくなってしまった人たちが帰ってきにくい状況も確かにあります。しかし普段は帰れなくても、祭りのときは誰もが戻ってこられる。そこに祭りが持つ求心力の強さがあると思います。

大和 お祭りは共同作業なんです。一人ひとりがいろいろなことをやらなきゃいけないし、そうした中で、お互いに見えてくるものもあります。

笹川 それが絆になり、故郷を大切に思う気持ちになる。代々つながっていかなくてはならないですね。

(平成25年3月10日、日本財団ビルにて)

地域伝統芸能復興基金の成り立ち

塩見和子 日本音楽財団理事長

2011年3月11日、東日本大震災が発生し、多くの尊い生命や貴重な財産が瞬間に失われるという大変悲しいことがありました。私たち個人として、また、公益財団として何をすべきかと考えたとき、支援の方法はさまざまですが、東北の被災した方々は一番大切なものを失われたわけですから、日本音楽財団も所有するなかで一番高価で歴史的にも貴重な楽器を売却してその支援に充てたいと考えました。

売却の方法は国際的なインターネットオークション会社を選択しました。世界中どこからでもアクセスでき、多くの人々に関心をもってもらうことで少しでも多くの資金が集まればと考えたからです。

楽器売却金の全額を寄付させていただきましたが、日本財団はそれで東北の「おまつり復興のための基金」を作ってくださいました。文化面の復興はいつの時代においても後回しにされがちですが、人間のつながりを大切にしながら継承されてきた地域伝統芸能復興のために使うことを決定してくださった日本財団の英断に大変感謝しております。



(しおみ かずこ 1965年、国際基督教大学 [ICU] 在学中より通訳として活躍。卒業後、米国を中心に、国務省、カナダ政府と契約して、政府交渉および国際会議などの同時通訳を務めた。1979年に帰国して、世界最大・最古のオークション会社サザビーズの日本代表に就任。1989年にはサザビーズジャパンの社長となり、1992年に退社後、1995年から日本音楽財団の理事長に就任)

日本音楽財団

公益財団法人日本音楽財団は、1974年3月に設立され、20周年を迎えた1994年からは、西洋クラシック音楽を中心に据えた「音楽分野における国際交流」事業を実施しています。現在、アントニオ・ストラディヴァリ等によって製作された世界最高クラスの弦楽器を20挺（ストラディヴァリウス・ヴァイオリン14挺、チェロ3挺、ヴィオラ1挺、ガールネリ・デル・ジェス・ヴァイオリン2挺）保有し、国籍を問わず一流の演奏家や若手有望演奏家に無償で貸与するとともに、世界の文化遺産ともいわれる名器を次世代に継承するため、楽器の管理に最大の努力を払っています。また、楽器貸与者による演奏会を毎年開催し、名器の音色に触れる機会を提供しています。

ストラディヴァリウス 1721年製ヴァイオリン「レディ・ブラント」

ストラディヴァリウスは、17～18世紀にイタリアの名工アントニオ・ストラディヴァリによって製作された弦楽器の総称です。音色の美しさから弦楽器演奏家であれば誰でも一度は手にしたいと願う名器です。中でも「レディ・ブラント」は保存状態がきわめてよく、ストラディヴァリの楽器製作の原型としてたいへん高く評価されています。

日本音楽財団は東日本大震災の復興を支援するために、所有する「レディ・ブラント」の売却を決定。オークションで扱われる楽器としては史上最高値の875万ポンド（約11億6800万円）で落札されました。日本音楽財団はその全額を日本財団の東日本大震災支援基金に寄付、この資金を元に「地域伝統芸能復興基金」（まっとり応援基金）が新たに創設されました。



支援のコンセプト

伝統芸能の宝庫、東北。

長い年月をかけ、故郷の暮らしのなかで、それぞれの土地の人々が大切に受け継いできたお祭りは、地域の人々の心を通いあわせてきました。

世代を超え、人々を結びつけてきたお祭りはその土地に共に生きる証として、人々の心の支えであり、復興の礎です。

日本財団は、それぞれの地域の風土から生まれ育って、暮らしや心を育んできたお祭りを応援します！

1 芸能・祭りに必要な物品の購入・制作・修理への支援

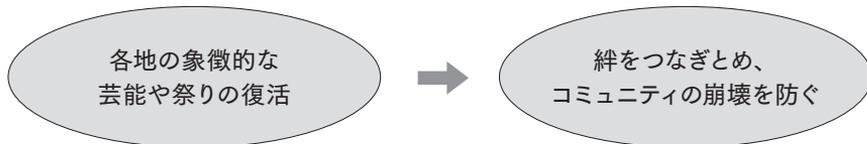
<支援の意義>

- ◎郷土：その土地に生きる証、土地に根差した生活の中で受け継がれてきたもの、郷土への思い・誇りをとりにどす
- ◎絆：共に生きる人々の間にある絆。世代を超えて、過去から今、そして未来へとつなぐ地域の絆をとりにどす
- ◎鎮魂：先人の魂は、永遠に次の世代へと継承されていく。生き残った者に、困難を乗り越える力を与えるのは、祖先や死者への深い哀悼と祈り＝祭り

1-1. 地域の中核的な年中行事、祭りに出演する芸能保存会への支援

対象：復興第一歩を象徴する各地の中核的な年中行事や芸能、祭り。連合体を組めることが望ましい

内容：山車、太鼓、道具（面、衣装など）の購入・制作・修理



※対象外とするもの

- 町内会単位で開かれる祭りのような小規模なもの／全国に知れわたっている大規模なもの
- 文化財指定の建造物、有形民俗文化財（絵画・彫刻・古文書など）など文化庁の支援があるもの
- 他の支援機関や各県に設置された小口の補助制度の対象になるもの

1-2. 太鼓に特化した支援

対象：地域の主要な祭りへの出演、または子どもに対する継承活動に意欲的な太鼓保存会等

内容：太鼓等の購入・修理

各地域独自の太鼓の「節」
地域の文化的シンボル
➔ 地域の絆をつなぎとめる

精神世界を表現する楽器
(祭礼・歌舞伎・能・神社仏閣)
➔ 仲間の供養

2 芸能・祭りを行う場としての神社への支援

2-1. 鎮守の森復活プロジェクト

<支援の意義>

- ◎先祖や氏神様がやどる神聖な場所とされてきたものを取りもどし、被災者の鎮魂の森として、魂を慰める
- ◎祭りを行う場、住民同士が絆を深める場とされてきたものを取りもどし、芸能披露の場を復活させ、コミュニティを再生させる
- ◎唯一日本の潜在自然植生をそのまま保全してきた森(=日本の本来の森)を復活させ、失った自然を取り戻す

対象：復興の象徴となる各地の中核的な神社

内容：鎮守の森の復活(植樹)に直接必要な土壤改良費、苗代、ワラ代他

住民の集う場・故郷を取り戻す



コミュニティの核の復活

2-2. 社殿の再建

<支援の意義>

- ◎神社は祭りをとおして地域の核となり、住民同士をつなぐ重要な役割であり、住民の集う場、コミュニティの核を取り戻す
 - ◎伝統芸能を奉納する場を取り戻し、芸能の継承につなげる
- 対象：1.復興の象徴となる中核的な神社。2.早い段階で官司による主体的な働きかけがあること。3.氏子総代、住民の理解および賛同が得られること。4.ある程度の自己資金を用意できること。

内容：地盤調査費、設計費、工事費等

神社参拝の豆知識



○鳥居をくぐる

鳥居はそこから聖なる神域が始まることを示しています。鳥居をくぐる前に立ち止まって一礼しましょう。鳥居や参道の中央は「正中」といって神の通り道とされるので、左右どちらかの端を歩きます。参拝を終えて帰るときも参道の端を歩き、鳥居を出たら振り返って一礼します。

○手水の作法

神道では清浄を尊ぶので、参拝の前に必ず手水舎で身を清めましょう。手水舎の前で軽く一礼し、右手で柄杓を持って水をすくいます。その水で左手をすすぎます。次に柄杓を左手に持ち替え、右手をすすぎます。再び柄杓を右手に持ち替え、左手のひらに少し水をため、その水で口をすすぎます。最後に柄杓を立て、柄杓に残った水で柄杓の柄を流して清めます。終わったら柄杓を伏せて元の位置に戻します。最後に手水舎の前で一礼します。

○拝礼のしかた

拝殿の前に立ち、軽く一礼します。賽銭箱の前まで進み、もう一度一礼して賽銭をそっと入れます。鈴があれば、ひもを振って鈴を鳴らします。それから腰を90度くらいに深く折って2回お辞儀をします。次に、胸の高さで両手を肩幅くらい開き、拍手を2回打ちます。打つとき右手を少し引きます。手を合わせたまま祈りや願いをし、再び90度くらいお辞儀をします。この二拝二拍手一拝が基本ですが、二拝四拍手一拝をする出雲大社などもありますから、その神社の作法に従います。

○お守り

お守りは神職が神前で祈禱して神の霊力が込められたもの。日々の災難から守っていただくために常に身につけておきましょう。お守りやお札などの授与品の霊力は1年で消えるとされるので、1年たったらいだいた神社に返納し、新しい授与品をいただきます。授与された神社が遠方の場合は、近所の神社に納めてもかまいません。

原 章

まつり応援基金支援実績一覧・収支報告

単位：円

| | |
|------|---------------|
| 基金総額 | 1,168,716,322 |
| 決定金額 | 640,626,050 |
| 基金残額 | 528,090,272 |

単位：円

| 時期 | 団体名 | 事業名 | 支援総額 | 対象団体数 | 対象団体 | 各支援金額 | 主な支援内容 | | | | | |
|---------------------------|---------------------------------------|---------------------------------------|---------------|-------|--------------------------|------------------------|--|------------|---|-------------------------|-----------|--------------------------|
| 基金総額 | | | 1,168,716,322 | | | | | | | | | |
| 第1回 平成23 年7月 | 釜石虎舞保 存連合会(岩 手) | 山車の制作及び 太鼓の購入 | 23,272,000 | 6 | 東前青年会 | 5,651,900 | 【新規】山車1、宮太鼓1、附太鼓1 | | | | | |
| | | | | | 尾崎青友会 | 5,651,900 | 【新規】山車1、宮太鼓1、附太鼓1 | | | | | |
| | | | | | 只越青年会 | 5,651,900 | 【新規】山車1、宮太鼓1、附太鼓1 | | | | | |
| | | | | | 平田青虎会 | 4,987,500 | 【新規】山車1 | | | | | |
| | | | | | 年行事太神楽 | 664,400 | 【新規】宮太鼓1、附太鼓1 | | | | | |
| | | | | | 箱崎虎舞 | 664,400 | 【新規】宮太鼓1、附太鼓1 | | | | | |
| | 石巻日高見太 鼓(宮城) | 太鼓の購入(事 業完了) | 7,060,427 | 1 | 石巻日高見太 鼓 | 7,060,427 | 【新規】長胴太鼓6、締太鼓2、抱え桶太鼓1 | | | | | |
| 第2回 平成23 年8月 | 磯草虎舞保 存会(宮城) | 太鼓の購入(事 業完了) | 10,143,546 | 1 | 磯草虎舞保存 会 | 10,143,546 | 【新規】長胴太鼓3、桶胴太鼓5、締太鼓3 | | | | | |
| 第3回 平成23 年9月 | 大畑町郷土 芸能保存団 体連合会(岩 手) | 山車、獅子頭の 制作及び太鼓な どの購入 | 76,665,387 | 9 | 城内大神楽 | 15,817,560 | 【新規】獅子頭10、山車1、獅子反物10、装束一式 | | | | | |
| | | | | | 中須賀大神楽 | 11,920,995 | 【新規】獅子頭3、山車1、山車収納庫1、太鼓1、獅子反物3 | | | | | |
| | | | | | 松の下大神楽 | 3,518,505 | 【新規】獅子頭2、山車台車1、獅子反物2、山車幕2、 のぼり2、装束一式 【修理】山車1 | | | | | |
| | | | | | 安渡大神楽 | 8,003,468 | 【新規】獅子頭5、山車1、半纏一式80、横断幕1、のぼり5、 獅子幕5 | | | | | |
| | | | | | 吉里吉里大神 楽 | 4,252,500 | 【新規】山車1 | | | | | |
| | | | | | 向川原虎舞 | 7,713,607 | 【新規】山車1、山車収納庫1 | | | | | |
| | | | | | 安渡虎舞 | 5,931,000 | 【新規】山車1、装飾一式、太鼓2、半纏60、装束一式 | | | | | |
| | | | | | 陸中弁天虎舞 | 10,004,400 | 【新規】山車1、山車収納庫1 | | | | | |
| | | | | | 城山虎舞 | 9,503,352 | 【新規】山車1、山車収納庫1 | | | | | |
| | | | | | | 大船渡市郷 土芸能協会 (岩手) | 装束の制作及び 太鼓などの購入 (事業完了) | 19,332,720 | 6 | 浦浜念仏剣舞 保存会 | 3,450,100 | 【新規】刀10、締太鼓2、鳥兜4、面5、装束一式 |
| | | | | | 門中組振興会 | 717,727 | 【新規】装束一式、笛5 | | | | | |
| | | | | | 仰山流笠崎鹿 踊保存会 | 3,887,559 | 【新規】太鼓9、鹿頭9、鹿角8、バチ20、装束一式 | | | | | |
| | | | | | 永浜鹿踊保存 会 | 4,777,200 | 【新規】太鼓8、バチ16、装束一式 | | | | | |
| | | | | | 西館七福神保 存会 | 2,192,125 | 【新規】長胴太鼓2、装束一式、笛5 | | | | | |
| | | | | | 甬嶽獅子舞 | 4,308,009 | 【新規】締太鼓6、笛10、獅子頭5、装束一式 | | | | | |
| 第4回 平成23 年11月 | 相馬市神楽 保存会(福島) | 神楽用物品の購 入(事業完了) | 1,856,400 | 3 | 磯部歌神会 | 336,000 | 【新規】鈴2、笛10、半纏10、オカメ装束 | | | | | |
| | | | | | 岩子青年会 | 659,400 | 【新規】大太鼓1、小太鼓1 | | | | | |
| | | | | | 新田神楽保存 会 | 861,000 | 【新規】大太鼓1 | | | | | |
| 石巻地区文 化協会連絡 協議会(宮城) | 獅子頭の制作、 太鼓や衣装の購 入及び修理(事 業完了) | 獅子頭の制作、 太鼓や衣装の購 入及び修理(事 業完了) | 13,165,770 | 7 | 田代島獅子舞 保存会 | 2,118,000 | 【新規】大太鼓3、大太鼓台3、小太鼓3、獅子頭(幕付)1、 獅子用着物一式8、横笛10、バチ20、法被20 | | | | | |
| | | | | | 大曲浜獅子舞 保存会 | 3,206,320 | 【新規】長胴太鼓2、太鼓台2、バチ20、獅子頭1 【修理】獅子頭1 | | | | | |
| | | | | | 渡波獅子風流 塾 | 2,666,000 | 【新規】大太鼓4、小太鼓8、獅子頭(幕付)1、鉦3、横笛10、 法被15 | | | | | |
| | | | | | 雄勝町朋ばやし 獅子舞味噌 作愛好連 | 3,514,000 | 【新規】大太鼓6、大太鼓台6、獅子頭2、笛6、法被20 | | | | | |
| | | | | | 河南鹿嶋ばやし 保存会 | 686,000 | 【修理】大太鼓3 | | | | | |
| | | | | | 大沢南部神楽 保存会 | 225,750 | 【修理】大太鼓1 | | | | | |
| | | | | | 女川漁港大漁 獅子舞まむし | 749,700 | 【修理】長胴太鼓2 | | | | | |
| | | | | | | | | | | 安達大良太鼓 保存会 | 2,735,800 | 【新規】桶胴太鼓1、長胴太鼓4 |
| | | | | | | | | | | 福島県立相馬 高等学校相馬 太鼓部 | 2,107,518 | 【新規】大平太鼓1 |

| 時期 | 団体名 | 事業名 | 支援総額 | 対象団体数 | 対象団体 | 各支援金額 | 主な支援内容 |
|-------------|----------------|--------------------------|------------|-------|-------------------|------------|--|
| | | | | | 原町第一小学校子供九曜太鼓 | 1,192,365 | 【新規】桶胴太鼓1、縮太鼓2 |
| | | | | | 相馬野馬追太鼓 | 1,021,020 | 【新規】長胴太鼓2 |
| | | | | | 南相馬市立真野小学校万葉太鼓 | 1,747,830 | 【新規】長胴太鼓4、縮太鼓2 |
| | | | | | 飯館はなづか太鼓 | 7,852,005 | 【新規】桶胴太鼓1、長胴太鼓11、縮太鼓4 |
| | | | | | 天栄山黄金太鼓保存会 | 1,245,510 | 【新規】長胴太鼓2 |
| | | | | | 岩代國郡山うねめ太鼓保存会 | 2,208,000 | 【新規】桶胴太鼓1、長胴太鼓2、縮太鼓1 |
| | | | | | 愛宕陣太鼓連響風組 | 2,491,020 | 【新規】長胴太鼓4 |
| | | | | | 飯坂八幡神社祭り太鼓保存会 | 3,166,475 | 【新規】長胴太鼓3 |
| | | | | | 標葉せんだん太鼓保存会 | 4,215,036 | 【新規】大平太鼓2 |
| | | | | | 広野昇龍太鼓 | 309,498 | 【新規】桶胴太鼓2 |
| | | | | | ならは天神太鼓うしお会 | 9,696,950 | 【新規】桶胴太鼓4、長胴太鼓13、縮太鼓10 |
| | | | | | いなわしろ天鏡太鼓 | 180,000 | 【修理】桶胴太鼓1 |
| | | | | | みつもり太鼓クラブ | 504,945 | 【新規】長胴太鼓1、縮太鼓1 |
| | | | | | いわき市立宮小学校みや誠承太鼓 | 660,350 | 【新規】長胴太鼓1、縮太鼓1 |
| | | | | | 山木屋太鼓 | 3,915,386 | 【新規】長胴太鼓6、縮太鼓3 |
| | | | | | 地域活動支援センター「めぐみ」太鼓 | 4,333,057 | 【新規】大平太鼓1、長胴太鼓5、縮太鼓2 |
| 第5回平成23年12月 | 宮城県太鼓連絡協議会(宮城) | 太鼓の購入及び修理(事業完了) | 49,941,948 | 12 | 女川潮騒太鼓轟会 | 5,230,769 | 【新規】桶胴太鼓1、長胴太鼓5、銅鑼1、チャップ5 【修理】大平太鼓2、長胴太鼓1、縮太鼓3 |
| | | | | | 関上太鼓保存会 | 1,484,275 | 【新規】桶胴太鼓2、縮太鼓2 【修理】大平太鼓1、長胴太鼓2 |
| | | | | | 大森創作太鼓旭ヶ浦 | 3,460,000 | 【新規】長胴太鼓4、縮太鼓2 |
| | | | | | 豊里風太鼓風の会 | 2,856,751 | 【新規】長胴太鼓3、縮太鼓3、かつぎ桶太鼓5 |
| | | | | | 伊達の黒船太鼓保存会 | 5,699,424 | 【新規】長胴太鼓5、縮太鼓5、銅鑼1、かつぎ桶太鼓2 |
| | | | | | いそやまかり太鼓 | 907,887 | 【新規】縮太鼓3、かつぎ桶太鼓3 |
| | | | | | 創作和太鼓倭多里道の会 | 12,198,656 | 【新規】縮太鼓6、長胴太鼓10、大平太鼓1、大縮太鼓3 【修理】長胴太鼓5 |
| | | | | | わ組 | 3,027,507 | 【新規】縮太鼓10、かつぎ用桶胴太鼓6、平太鼓1 |
| | | | | | 浜虎太鼓 | 6,669,243 | 【新規】桶胴太鼓12、縮太鼓30 |
| | | | | | 中浜神楽保存会 | 2,540,164 | 【新規】長胴太鼓2、縮太鼓3、笛7 |
| | | | | | 平磯芸能保存会 | 5,197,372 | 【新規】桶胴太鼓3、縮太鼓5、長胴太鼓1、笛3、 チャンチキ2 |
| | | | | | 仙台市立中野小学校 | 669,900 | 【修理】長胴太鼓6 |
| | 川口神社(宮城) | 神輿の修理及び獅子舞など必要な物品の製作及び購入 | 27,778,200 | 1 | 川口神社 | 27,778,200 | 【新規】特大神輿運搬台1、特大神輿用胴巻金襴4、太鼓1、太鼓台1、バチ1、旗2、大のぼり1、猿田彦神装束一式、獅子頭1、獅子反物1、紋入装束170 【修理】神輿3 |
| 第6回平成24年1月 | 岩手県太鼓連盟(岩手) | 太鼓の購入及び修理(事業完了) | 17,874,646 | 6 | 大船渡女性会太鼓 | 2,693,876 | 【新規】長胴太鼓3、縮太鼓2、鉄筒1、チャップ1、 チャンチキ1、太鼓台10 【修理】長胴太鼓9 |
| | | | | | 久慈備前太鼓 | 4,509,000 | 【新規】縮太鼓4、片面ザル太鼓2、太鼓台19、鐘1 【修理】縮太鼓5、宮太鼓5、ゴルト縮太鼓7 |

| 時期 | 団体名 | 事業名 | 支援総額 | 対象団体数 | 対象団体 | 各支援金額 | 主な支援内容 |
|--------------------|-------------------|------------------------|------------|-------|----------------|------------|---|
| | | | | | 紅太鼓 | 779,415 | 【新規】桶胴太鼓3、締太鼓1、太鼓台4 【修理】長胴太鼓3 |
| | | | | | 鼓舞櫻会 | 4,099,427 | 【新規】平太鼓1、桶胴太鼓5、附締太鼓用革5、太鼓台6 |
| | | | | | 磯鷗太鼓 | 5,295,186 | 【新規】長胴太鼓8、締太鼓2、太鼓台10、鉄筒1 |
| | | | | | 永上太鼓 | 497,742 | 【修理】長胴太鼓2 |
| 第7回 平成24 年3月 | 青森県太鼓 連盟(青森) | 太鼓の購入及び 修理(事業完了) | 19,239,726 | 7 | 王将太鼓 | 1,378,692 | 【新規】長胴太鼓1、太鼓台1 |
| | | | | | 八甲田太鼓 | 393,120 | 【修理】大太鼓1、長胴太鼓1 |
| | | | | | 向中野剣舞保存会 | 1,581,619 | 【新規】拍子桶太鼓8、締太鼓2、締太鼓用座り台2 |
| | | | | | ニッ森神楽保存会 | 426,195 | 【新規】桶胴太鼓1、締太鼓2、締太鼓用金足台2 |
| | | | | | みよこ太鼓 | 9,940,610 | 【新規】大平太鼓1、長胴太鼓6、桶胴太鼓6、締太鼓4、太鼓台17 【修理】桶胴太鼓1、長胴太鼓3 |
| | | | | | 遊びっ鼓組 "遊" | 5,359,470 | 【新規】大平太鼓1、長胴太鼓6、大拍子太鼓6、締太鼓5、太鼓台18 |
| | | | | | 津軽海峡海鳴り太鼓保存普及会 | 160,020 | 【修理】中太鼓2、締太鼓1 |
| | 秋田県太鼓 連盟(秋田) | 太鼓の購入及び 修理(事業完了) | 5,085,612 | 15 | 羽川剣ばやし保存会楽峰太鼓 | 561,456 | 【修理】長胴太鼓4、締太鼓2、太鼓台1 |
| | | | | | やまばと太鼓 | 146,160 | 【修理】長胴太鼓2 |
| | | | | | 河辺太鼓保存会 | 363,888 | 【修理】長胴太鼓5 |
| | | | | | いずみ太鼓の会 | 85,680 | 【修理】長胴太鼓1 |
| | | | | | 蘭導 | 498,351 | 【新規】銅鑼2 【修理】平約太鼓1 |
| | | | | | 唐松太鼓保存会 | 171,360 | 【修理】長胴太鼓2 |
| | | | | | 刈和野大網太鼓 | 383,040 | 【修理】長胴太鼓4 |
| | | | | | 菖蒲太鼓保存会 | 259,770 | 【修理】長胴太鼓1 |
| | | | | | 東今泉八幡太鼓 | 534,240 | 【修理】長胴太鼓1、平約太鼓1 |
| | | | | | 仙北太鼓 | 459,480 | 【新規】長胴太鼓1 【修理】長胴太鼓2 |
| | | | | | 金沢八幡太鼓保存会 | 408,660 | 【修理】長胴太鼓2、締太鼓3 |
| | | | | | 大森太鼓愛好会 | 96,600 | 【修理】大拍子太鼓1 |
| | | | | | 大雄太鼓愛好会 | 698,670 | 【修理】長胴太鼓6 |
| | | | | | 能恵姫竜神太鼓 | 138,978 | 【修理】長胴太鼓2 |
| | | | | | 仁賀保太鼓伝承会 | 279,279 | 【修理】長胴太鼓4 |
| | 山形県太鼓 連盟(山形) | 太鼓の購入及び 修理(事業完了) | 2,647,914 | 2 | 太鼓道場「風の会」 | 970,200 | 【新規】長胴太鼓3 |
| | | | | | 龍・連山と和太鼓「龍」 | 1,677,714 | 【修理】長胴太鼓3、平約太鼓2 |
| | 茨城県太鼓 連盟(茨城) | 太鼓の修理(事業完了) | 248,000 | 1 | 下館若礮太鼓 | 248,000 | 【修理】長胴太鼓2、締太鼓1 |
| 第8回 平成24 年4月 | 八重垣神社 (宮城) | 被災した鎮守の森再生に向けた植樹(事業完了) | 10,591,650 | 1 | 八重垣神社 | 10,591,650 | 基盤工事、植樹及び植樹祭開催に係る経費 |
| 第9回 平成24 年7月 | 神明社(宮城) | 被災した鎮守の森再生に向けた植樹(事業完了) | 5,389,200 | 1 | 神明社 | 5,389,200 | 基盤工事、植樹及び植樹祭開催に係る経費 |
| | 石巻地区文化協会連絡協議会(宮城) | 獅子頭等の制作・修理及び太鼓等の購入 | 40,785,245 | 25 | 相川南部神楽保存会 | 1,150,000 | 【新規】神楽面23 |
| | | | | | 大室契約講 | 2,300,500 | 【新規】獅子頭(幕付)2、大太鼓2、横笛5、たっつけ風竹1 |
| | | | | | 小泊契約講 | 1,167,000 | 【新規】獅子頭(幕付)1、大太鼓2、横笛2 |

| 時期 | 団体名 | 事業名 | 支援総額 | 対象団体数 | 対象団体 | 各支援金額 | 主な支援内容 |
|----------------------|--------------------------|--------------------------|------------|-------|---------------|------------|---|
| | | | | | 小室契約会 | 584,000 | 【新規】太太鼓2、横笛5、バチ10、ひょっとこ面1、たっつけ風袴1 |
| | | | | | 伊勢畑地区獅子振り保存会 | 1,416,000 | 【新規】和太鼓1、太鼓台1、獅子頭(幕付)1、横笛2 |
| | | | | | 大浜地区青年部「八日会」 | 1,042,400 | 【新規】獅子頭1、獅子反物1、篠笛3 |
| | | | | | 桑浜羽坂地区 | 630,000 | 【新規】獅子頭(幕付)1 |
| | | | | | 下雄勝地区獅子振り保存会 | 1,416,000 | 【新規】和太鼓1、太鼓台1、獅子頭(幕付)1、横笛2 |
| | | | | | 名振地区 | 4,391,496 | 【新規】獅子頭1、獅子反物1、篠笛3、金鯱2、山車1 |
| | | | | | 船越地区 | 2,024,836 | 【新規】獅子頭1、横笛3、神楽舞台1 【修理】獅子頭1 |
| | | | | | 船戸地区獅子振り養成会 | 1,460,000 | 【新規】和太鼓1、太鼓台1、獅子頭(幕付)1、横笛4 |
| | | | | | 名神地区共和会 | 2,645,200 | 【新規】獅子頭1、獅子反物1、篠笛3、和太鼓2、太鼓台2 |
| | | | | | 立成会 | 2,725,200 | 【新規】獅子頭1、獅子反物1、篠笛3、和太鼓2、太鼓台2 |
| | | | | | 小網倉地区社鹿神楽保存会 | 1,269,500 | 【新規】装束10、長胴太鼓1、鉦1、横笛3、太刀3、神楽面10 |
| | | | | | 大原浜実業団 | 1,298,500 | 【新規】小太鼓2、バチ12、太鼓台2、横笛5、法被15、御神木横幕3 【修理】太太鼓1、獅子頭1 |
| | | | | | 大谷川実業団 | 2,109,000 | 【新規】大太鼓1、小太鼓1、太鼓台2、バチ10、獅子頭(幕付)1、横笛5、法被10、御のぼり旗4 |
| | | | | | 給分地区獅子振り保存会 | 1,274,000 | 【新規】大太鼓1、小太鼓1、太鼓台2、バチ12、獅子頭(幕付)1、横笛5、法被10 |
| | | | | | 十八成区 | 1,345,500 | 【新規】バチ12、横笛5、法被20、装束20、獅子頭(幕付)1 |
| | | | | | 小網倉地区実業団 | 1,645,000 | 【新規】大太鼓1、小太鼓1、太鼓台2、バチ12、獅子頭(幕付)1、横笛5、法被15、御のぼり旗4 |
| | | | | | 鼓浦実業団 | 2,458,500 | 【新規】大太鼓1、小太鼓2、太鼓台3、バチ20、獅子頭(幕付)1、横笛5、法被20、御のぼり旗14 |
| | | | | | 鹿立獅子舞保存会 | 2,016,000 | 【新規】獅子頭1、獅子反物1、長胴太鼓2 |
| | | | | | 泊実業団 | 503,000 | 【新規】法被15、御のぼり旗4 【修理】獅子頭1 |
| | | | | | 前網実業団 | 680,000 | 【新規】小太鼓2、太鼓台2、バチ12、吹流し2、御のぼり旗2 【修理】大太鼓1、中太鼓1 |
| | | | | | 谷川青年団 | 2,133,613 | 【新規】長胴太鼓1、附締太鼓1、太鼓台2、バチ12、獅子幕1、横笛6、法被15 |
| | | | | | 奇磯実業団 | 1,100,000 | 【新規】獅子幕1、大太鼓1、太鼓台1、横笛5、装束10、御のぼり旗4、法被5 |
| 第10回 平成24 年9月 | 女川町獅子振 り復興協議会 (宮城) | 獅子振りに必要 な物品の購入 | 29,687,058 | 12 | 相喜会 | 996,450 | 【新規】獅子頭(幕付)2、半纏17 |
| | | | | | 飯子浜実業団 | 1,708,770 | 【新規】太鼓1、締太鼓1、太鼓台2、半纏20 |
| | | | | | 女川実業団 | 2,670,230 | 【新規】宮太鼓1、桶太鼓1、太鼓台3、笛6、半纏30、装束一式 |
| | | | | | 尾浦青年団 | 3,993,150 | 【新規】長胴太鼓2、太鼓台2、半纏30 |
| | | | | | 桐ヶ崎区 | 1,224,770 | 【新規】宮太鼓1、太鼓台3、半纏20、笛2 |
| | | | | | 小栗浜実業団 | 2,684,850 | 【新規】長胴太鼓2、太鼓台2、半纏25、笛10 |
| | | | | | 竹浦実業団 | 2,858,100 | 【新規】長胴太鼓2、半纏30、笛10 |
| | | | | | 塚浜行政区 | 1,230,178 | 【新規】太鼓1、太鼓台1、半纏15、笛5 |
| | | | | | 寺間伝承行事 保存会 | 2,037,735 | 【新規】緋止太鼓2、太鼓台2、チャンチキ1、半纏20、笛5 |
| | | | | | 野々浜区 | 1,202,250 | 【新規】大太鼓1、太鼓台1、半纏20、笛5 |
| | | | | | 鷲浦実業団 | 2,623,425 | 【新規】長胴太鼓1、締太鼓1、太鼓台2、半纏20、笛10 |
| | | | | | 鷲神氏子総代 会 | 6,457,150 | 【新規】獅子頭2、獅子頭幕2、長胴太鼓6、太鼓台6、半纏50、笛10 |
| 第11回 平成24 年10月 | 青果稲荷神社 (宮城) | 被災した鎮守の 森再生に向けた 植樹 | 8,960,000 | 1 | 青果稲荷神社 | 8,960,000 | 基盤工事、植樹及び植樹祭開催に係る経費 |
| | 川口神社(宮 城) | 被災した鎮守の 森再生に向けた 植樹 | 11,025,000 | 1 | 川口神社 | 11,025,000 | 基盤工事、植樹及び植樹祭開催に係る経費 |
| | 鳥海塩神社 (宮城) | 被災した鎮守の 森再生に向けた 植樹 | 7,398,000 | 1 | 鳥海塩神社 | 7,398,000 | 基盤工事、植樹及び植樹祭開催に係る経費 |

| 時期 | 団体名 | 事業名 | 支援総額 | 対象団体数 | 対象団体 | 各支援金額 | 主な支援内容 |
|---------------------|---------------------|-------------------|----------------------|--------|-------------|---|--|
| | 小竹浜氏子会(宮城) | 獅子頭の制作(事業完了) | 472,500 | 1 | 小竹浜氏子会 | 472,500 | 【新規】獅子頭1 |
| 第12回 平成25 年4月 | 本吉法印神楽会(宮城) | 神楽面の制作及び神楽用物品等の購入 | 23,058,488 | 1 | 本吉法印神楽会 | 23,058,488 | 【新規】神楽面27、装束一式 |
| | 本吉太々法印神楽保存会(宮城) | 神楽面の修復及び神楽用物品等の購入 | 15,730,900 | 1 | 本吉太々法印神楽保存会 | 15,730,900 | 【新規】装束一式 【修理】神楽面35 |
| | 気仙沼市文化協会(宮城) | 芸能に必要な物品の購入 | 20,496,198 | 5 | 大沢伊勢神楽保存会 | 11,814,755 | 【新規】山車1、宮太鼓1、締太鼓1、半纏200、笛5、紅白幕2、保管用物置1 |
| | | | | | 沢虎舞 | 467,000 | 【新規】締太鼓5 |
| | | | | | 古谷館打ちばやし保存会 | 3,867,263 | 【新規】裨影抜き太鼓2、桶胴太鼓15、化粧まわし30、太鼓台30、虎頭1、虎反物1、保管用物置1 |
| | | | | | 只越芸能保存会 | 2,587,770 | 【新規】七福神用装束一式、締太鼓11、太鼓用台7、幟旗1、笛5、紅白幕8、保管用物置1 |
| | 八幡太鼓保存会 | 1,759,410 | 【新規】紙太鼓6、三丁掛太鼓6、法被38 | | | | |
| 小泉八幡神社(宮城) | 獅子頭や天狗面等祭りに必要な物品の購入 | 1,761,750 | 1 | 小泉八幡神社 | 1,761,750 | 【新規】飯環珞1、神輿用赤白綱1、獅子頭1、獅子反物1、天狗面1、猿田彦神装束1、鳥兜1、紋付旗1、小忌衣14 | |
| 葉山神社(宮城) | 被災した神社の再建 | 141,375,000 | 1 | 葉山神社 | 141,375,000 | 【新規】本殿、幣殿、拝殿、神楽収蔵庫、神楽準備室、齊室、事務室等の建築 | |
| 合計 | | | 640,626,050 | 147 | | | |
| 基金残額 | | | 528,090,272 | | | | |

■平成25年4月現在。ただし、第12回については見込み。

■支援物品の名称は団体からの報告に基づいて記載。

■支援金額及び支援内容は、事業が未完了の団体は決定時の金額及び内容を記載し、事業が完了した団体は完了時の報告に基づいて記載した。事業完了団体は事業名の後に(事業完了)と記載。

| 事業内容別 | 団体数 | 件数 | 支援金額(単位:円) |
|------------------------------|-----|----|-------------|
| 地域の中核的な年中行事、まつりに出演する芸能団体への支援 | 81 | 16 | 452,641,589 |
| 太鼓に特化した支援(平成23年11月~平成24年4月) | 61 | 7 | 144,620,611 |
| 鎮守の森復活プロジェクト(平成24年4月~) | 5 | 5 | 43,363,850 |
| 合計 | 147 | 28 | 640,626,050 |

| 県別 | 団体数 | 件数 | 支援金額(単位:円) |
|-----|-----|----|-------------|
| 宮城県 | 73 | 18 | 424,820,880 |
| 岩手県 | 27 | 4 | 137,144,753 |
| 福島県 | 21 | 2 | 51,439,165 |
| その他 | 25 | 4 | 27,221,252 |
| 合計 | 146 | 28 | 640,626,050 |

■団体数については重複する分はカウントせず。同一団体でも事業が異なる場合があるため事業内容別と県別の団体数は一致しない。

編集後記

平成23年7月。まつり応援基金の最初の支援を決定し、目録贈呈に訪れた岩手県釜石市では、大きな瓦礫が残る広場で港祭りが開催され、約300人の熱気に包まれていました。普段は物静かな釜石虎舞保存連合会会長の岩間久一さんがすっかり血気盛んな祭り男に変わり、虎舞を舞う姿はとにかく格好よく、伝統芸能には無縁だった私も子どものように気持ちが高揚していました。周りには、躍動感溢れる虎を食い入るようにつめる少女や、かわいい虎の姿をした少年に寄り添い涙を流すお母さんもいました。調査に訪れた時に岩間さんがつぶやいた「いま虎舞をやらないと、釜石から人がみんないなくなってしまう」という言葉が改めて胸を打ち、この地域が再び元気になるには虎舞が絶対に必要だと実感した瞬間でした。

それ以降、150を超える芸能保存会や神社の調査を行い、いくつもの祭りに参加させてもらう中で、たくさんの感動をいただき、芸能や祭りが地域とそこに住む人々とをむすびつなぐかけがえのないものだという思いがますます強くなりました。

この事業を担当させてもらったことに心から感謝するとともに、被災されながらも伝統芸能を通じて地域の復興にご尽力されている皆さまに対し、改めて敬意を表したいと思います。
(日本財団公益チーム 枡方瑞恵)

発行 2013年

編著者 日本財団公益チーム

発行者 日本財団

〒107-8404 東京都港区赤坂1-2-2

電話 03-6229-5111 fax03-6229-5110

印刷所 (株) NPC コーポレーション

